とある魔法の交差点(クロスポイント)

マシャカズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔法の交差点（クロスポイント）

【Ｎコード】
Ｎ０６６５Ｍ

【作者名】
マシャカズ

【あらすじ】
学園都市に住む不幸体質高校生、上条当麻。
いつものように御坂美琴に追いかけられていた彼の目の前に謎の“穴”が出現、瞬く間に引きずりこまれてしまう。
そして上条が目を覚ますと、そこには一人の少女が立っていた。

第０１話　各人の世界の日常（前書き）

小説初投稿。
至らない部分が多々あると思いますが、完結目指して頑張ります。
それでは本編をどうぞ。

第０１話　各人の世界の日常

学園都市に住む上条当麻は不幸な少年である。
　夏休み後半に記憶喪失に陥り、なんの流れか純白シスターと同居。無限ともいえる彼女の食欲を満たすのに奔走する日々が続いている。
　巫女少女を救出した際には右腕をスッパリ切断（後日入院）し、ビリビリ中学生の妹一万人を助けるために学園都市最強と謳われるレベル５第一位との喧嘩（とかけ離れた乱闘）で再度入院。
遊びにいった海の家では天使と遭遇、さらに裏の顔を持つ友人にコテンパンに伸されてまたも入院。実家爆破という大きなオマケも付いた。
その他ゴーレム襲来に２５０人を相手取ったシスター争奪戦……と、大きいものだけ挙げてもこれ程だ。細かいものを含めればキリがない。

今日も目覚ましが電池切れを起こし始業時間１０分前に起床。
慌てて家を飛び出した……はいいが角を曲がった所で空き缶を蹴飛ばし、それが不良の頭にクリーンヒット、そこから１対多数の鬼ごっこへと発展。
どうにか撒いて学校に着いた時には一限目が終わっており、担任の月詠小萌からお説教をくらってしまう。
やっとこさ教室に着き、一息つけようと机へ向かうも鬼ごっこの疲労がきたのか足がもつれ、近くにいた女生徒の豊満な胸にダイブ。
吹寄制理＋男子生徒の制裁を受け、昼まで保健室で休むハメとなった。

そして昼休み。

「不幸だ……」
机にうなだれながら呟いた。そこへ
「にゃ～。どうかしたのかにゃ～カミヤン？」
金髪にサングラスが特徴のクラスメイト、土御門元春が近づいてきた。
「……弁当、忘れた」
友人の問いに答える上条。
急いで出た為つくる時間など当然なく、財布も携帯も部屋に放置。
何も買えない。何も喰えない。しまいには机に沈み込む。
そんな彼に一言。

「ま、当然の報いだにゃ～」

「オイ！！　ここは労りの言葉を掛けるところだと上条さんは思うのですが！？」
「うるさい！！　あんなおいしい思いしといてそれ以上を望むってのは贅沢ってもんですたい！！」
「せやでカミヤン！！」
青髪ピアスも会話に加わってくる。
「このクラスで五指に入る巨乳に飛び込むなんて羨ましすぎてボクァ殴りたくなるわぁ！」
「いやもう殴ったろ！！　ってかお前が一番多かったろ！！」
「回数なんて関係ないねん！大事なのはボクらの気が済むかどうかや！！」
「その通りですたい！！」
「容赦ねぇな、てめぇら！！」
思わず立ち上がろうとするが
「は、腹減った……」
エネルギー不足で動けない。再び机に突っ伏す。朝からなにも食べてないのだ。成長期の彼には拷問以外のナニモノでもない。

「上条君」

静かな声で呼ばれた。顔を向けると

「姫神……」

寡黙な巫女少女こと姫神秋沙が立っていた。両手にはハンカチで包まれた弁当箱が一つずつ。

「お弁当。持ってくるのを忘れたなら。私のをあげる」

「……いいのか？」

「うん。多めに作り過ぎたから。食べてもらえると助かる」

「……」

ハシッ、と感極まり彼女の手を掴む。

「ありがとうございます姫神様！　あなたは命の恩人です！！

上条当麻、このご恩は一生忘れません！！」

「君。いちいち大袈裟」

呆れ気味に答えつつも満更でもない様子の姫神。よく見れば若干ながらも頬が赤い。

そもそもこの弁当、はじめから彼に渡すつもりで作ってきたのだ。

どのタイミングで切り出そうか悩んだが、今の会話から昼食がないと判断。渡りに舟など思いながら作戦を決行した。

結果はこの通り、大成功といっていいだろう。ここまで喜ぶとは予想外だったが。

「はい。これ」

弁当を手渡す姫神。

「ありがとうございます。大事に味わわせていただきます」

頭を低くしながら受け取ろうとする上条。

しかし

「させるかぁ！」

「にゃ〜！」
妨害が入る。

「なっ！！」
「あ」
気付けば上条の弁当は土御門・青髪ピアスの手に。
そして

ガツガツムシャムシャバクバク！

「だぁー！！　やめろてめぇら！！　ってか返せ俺の弁当！！」
「知ったこっちゃないにゃ！　見せつけられるこっちの身にもなれってんですたい！！」
「こんな非常時でもカミヤンのフラグ体質は絶好調なんやな！
なんかハラ立つからボクも食うで！！」
喋りながらも二人の食べるペースは変わらない。
「意味わからんコト言ってねーでとにかく食うのをやめろ！！」
「……結局こうなるのね。……ふふ。私ってホント報われない」
暗い空気を纏いながら呟く姫神。

「あぁもう、不幸だぁーーーーっ！！」
喧騒のなか、悲痛な絶叫が響き渡った。

その後、吹寄からパンを恵んでもらい、どうにか食い繋いだ上条であった。

※※※※※

「……以上が現在の状況よ。今のところ大きな被害はないけど、いつ、どこで、何が起きてもおかしくないわ。みんな警戒は怠らないようにね」
『ハッ！！』
時空管理局提督『アースラ』。とある一室で艦長リンディ・ハラオウンを中心とした作戦会議が行われていた。
「本日の定例会議はここまで、各自持ち場に戻ってちょうだい」
「艦長」
部屋にいた者が一人、また一人と出ていくなか、幼さの残る声が呼び止めた。
「あらクロノ。どうしたの？」
クロノ・ハラオウン。リンディの息子にして、この艦のクルーでもある。
「ロストロギアの捜索も重要ですが、頻繁に起きる“あの現象”とそれの関係性は？」
「……“空間のひずみ”、の事ね？」
無言で頷くクロノ。
「今の段階ではなんともいえないわ。ただ……」
「ただ？」
「関係があろうともなかろうとも、私達がやる事に変わりはないわ」
「そうですね」

※※※※※

海鳴市。

この街に住む少女、高町なのはは少し前まで、どこにでもいる平凡な小学3年生だった。
今、彼女はとある者から事情を聞き、魔法少女としてその人の手伝いをしている。

今日も街へ繰り出し、ロストロギア『ジュエルシード』を無事封印。
部屋に戻ったところだった。
「ふぇええぇぇ……」
ベットに沈み込むなのは。疲れてヘトヘト、なにも考えられない。
「（お疲れ様なのは。大丈夫？）」
声を介さない念話で彼女に語りかけるフェレット。
ユーノ・スクライア。
魔法少女をやるきっかけとなった人物だ。
「（うん、大丈夫だよ。ありがとうユーノ君）」
「（そうか。よかった。……ごめんね、僕のせいでつらい思いをさせて）」
「（私がやりたいって、思ってやってる事だもん。ユーノ君のせいじゃないよ）」
「（それでも……）」
「（明日もまた、がんばろうね）」
「（……そうだね。また明日、だね）」
「（うん。それじゃあおやすみ）」
「（おやすみ、なのは）」
夜は静かに更けていった。

※※※※※

交わることのなかった2つの世界。
数多の世界をわたる船艦。

それら3つが交差するとき、

物語は始まる。

第０１話　各人の世界の日常（後書き）

質問・意見・感想などありましたら書いていただけると幸いです。

第０２話　突然の「不幸」（前書き）

修正を加えました。
内容は変わっていませんのでご安心を。

第０２話　突然の「不幸」

「な、長かった……」

陽も落ち始め、辺りが茜色に染まるなか、上条はゆっくりと歩いていた。
メシ抜きは免れたもののパン数個でもつ程、彼の身体は低燃費ではない。おまけに午後の体育で長距離走が行なわれ、ただでさえ少なかったライフも今現在ゼロに近い。
「早くうち帰ってなんか食おう……」
冷蔵庫の中身がまだ残っていればいいのだが望みは薄い。

「あ、いたいた。ちょっとアンタ、今日こそは……って、待ちなさいよ！　聞こえてんでしょ！？　なに無視してんのよ！！」

できるだけ無駄な動作を出さないように歩く上条。必死なため、周りのことなど目にも耳にも入らない。

「待てって、言ってんだろ無視すんなやグルァ！！」
「うおぉ！？」

背後から突然の閃光と火花。あわてて右手をかざし電撃を打ち消す。

幻想殺し（イマジンブレイカー）。
身体検査で結果を出せず、無能力者（レベル０）の烙印を押されている上条だが、その右手には超能力でも魔術でも、“異能の力”であれば神の奇跡さえも打ち消す力を宿している。
しかし、その有効範囲は右手、正確には手首から先のみ。他の部分は普通の高校生となんら変わりない。今だってもう少し反応が遅け

れば感電死だ。
「あぶねーだろビリビリ！！　当たったらどーすんだ！？」
「どうせ効かないんだからいいでしょ！！」「よくねーよ！　ってか出会い頭に電撃放つってどんな挨拶だよ！？」
「気付かないアンタが悪いんでしょ！　それと何度も言うけど私には御坂美琴って名前があんの！　いい加減覚えなさいよ！」
振り向いた先には常盤台中学の制服に身を包んだレベル5、超電磁砲（レールガン）こと御坂美琴が立っていた。

「あー、御坂か……不幸だ……」
「人の顔みて第一声がそれか！？　しかもなにその今認識したみたいな言い方！？」
バチバチと放電しながら噛み付く。
「なにも言わないでください。朝からマトモに食べてない上条さんは歩く度にライフが減るんですよ……」
ゲンナリとした顔で返す彼の言葉は気の毒としかいいようがない。
「な、何があったのよ？」
彼女も鬼ではない。事情を訊いてみる。
「今朝は目覚ましが力尽き、家を出たところで不良の襲撃にあいまして……」
「朝からハードなことになってるわねぇ」
「学校着いたーって思ったら担任から『今度はどんな女の子を助けてたんですかー？』なんて変な尋問されるし……」
「へぇ～……。で、実際はどうなのよ？」
「ん？　いや今回は人助けとかじゃなくて純粋な俺自身の不幸が招いた結果といいましょうか……」
「は？」
「こっちの話だ、気にすんな。そんで昼休みに入ってから弁当ないのに気付いてさ。財布も忘れたもんだからどうしようもなくなって

さぁ……」
「それで食べ損ねた、と。友達に言えば分けてくれたんじゃないの？」
「いや、あいつら分けるどころか慈悲深いクラスメイトがくれた弁当すら食いやがってなぁ……」

ここまで言ったところで突然
「……ねぇ」
「ん？」
上条の回想に割り込んできた。

「そのクラスメイトってさ、やっぱりさ、その、女子、なの……？」
俯きながら尋ねる。よく見れば、パチパチと断続的に放電している。
「いや、上条さん的にその『やっぱり』ってのは傷つくのですが……まぁ、お察しの通り女子だけど、それがどうか――ってぉわっ！？」
反射的に右手を前に出すとパァン、と小気味いい音をたてながら電撃が消滅した。
「ちょっと待て！！　今のはさすがに命の危機を感じましたよ！？　いきなりなにしやがるのですかミコトサマ！？」
「うっさい！！」
涙目で訴える上条だが、当の御坂は絶賛帯電中である。
「おとなしく当たって人生イチからやり直せやフラグメーカーがぁ！！」
「へ？　いや、ちょ、なぜに怒っていられ、ってなんか殺人予告されたしビリビリが次々飛んでくるし！！」
迫りくる電撃を必死に打ち消す。一瞬でも判断を誤ればタダではすまない。
「だぁもう、避けるな防ぐな二度と立つなー！！」
「断固拒否します！！」

いつの間にか、いつもの追いかけっこに発展していた。
「結局こうなるのかよ！？　くっそぉ、不幸だぁーーーーー！！」
走りながら叫ぶ上条。
しかし、本当の“不幸”がこれから訪れることを彼らは知る由もなかった。

※※※※※

警報音が鳴り響き、アーカム内に緊張が走る。
「変動感知！　“ひずみ”発生します！」
オペレーターであるエイミィ・リミエッタの報告でその度合いは高まっていく。
「どの世界で起こるか割り出せる？」
「今やっています。ただ……」
リンディの指示で作業を進めるエイミィだが、表情が優れない。
「ただ、どうしたんだ？」
続きを催促するクロノ。
「今まで発生した中でも最大級の“ひずみ”なんです。下手するとその時空になんらかの影響を与える可能性があります」
「具体的には？」
「原因不明の異常気象に震源のない大地震、人体への影響も考慮すれば急激な体の変調を訴えることもあるかと……」
「早急に手を打たなきゃいけないわね」

「そうですね」
リンディに同意したところで
「解析結果出ました！　　……え、うそ！？」
「どうした？」
突然声をあげたエイミィにクロノは問い掛けた。
「もう一ヶ所“ひずみ”が発生した世界が近くに！　しかも……」
ここで衝撃の事実が告げられる。

「この二つ、お互いに引き合ってるんです！！」

『！！』
クルーに戦慄が駆ける。
「ばかなっ！？　ありえない！！」
クロノが叫ぶ。
「二つの世界が繋がろうとしてるっていうの！？」
思わずリンディも立ち上がる。
本来、平行世界は相互不干渉であり、例え一つの世界が消滅しようとも他の世界にその余波が来ることはない。
「とにかく現場へ、急いで！！」
『了解！！』
「エイミィは引き続き解析を！！」
「了解です！」
リンディの指示で慌ただしくなる艦内。
「クロノ、あなたも出撃準備を」
「わかりました」
後方にある転送装置へ向かったのを視認すると再びモニターを見る。
「いったい、何が起ころうとしているの……？」

※※※※※

「待ちなさいよアンタ！！」
「待ってたまるかぁ！！」

路地裏の細く曲がりくねった道を利用して追撃を避ける上条と、そんな彼を執拗に追い掛ける御坂。
こんな状態が１時間続いている。
持ち前の不幸体質故か、不良とのイザコザに巻き込まれやすい上条は、相手を撒いたり飛び道具を避けたりなど「逃げ」の方法を心得ている。
これは上条が弱いからではない。グループで動くことの多い彼らとケンカすれば必然的に１対多数の状況が生まれる。そうなれば個人の強さなど「数」の前ではないに等しい。
彼自身ケンカは１対１、二人だときつく三人以上なら迷わず逃げる、と決めている。もちろん相手が一人でも、女子供を殴るほど人でなしではない。
だから逃げる。
意図せず空のポリバケツを蹴飛ばし、先にいた猫を脅かしてしまう。
依然１０メートル後方には帯電するビリビリ中学生。
「ぅおっ！？」
飛んできた電撃の槍を打ち消す。
「くそぉっ！」
転びそうになりながら次の角を曲がる。

が
「げっ！？　　行き止まり！？」
三方を壁に囲まれた袋小路に辿り着いてしまう。

「ふふふー。覚悟なさーい」
恐怖の体現、御坂サマの声。

「さぁて、積年の恨み、晴らさしてもらうわよ～」
ジリジリと近づいてくる彼女に後ずさりで距離をとる上条。
「ちょっと待てください御坂さん。上条さんはレベル０なのでありましてこれ以上のビリビリは勘弁していただきたいのですよ」
「うっさい！！　黙ってくらい――」
不意に彼女が言葉を切った。上条の後ろを凝視している。
「アンタ、後ろ……」
「……振り向いた瞬間に背後からレールガンで撃ち抜くのか？」
バックを続ける上条。
「いや、そういうんじゃなくて……」
「ダマされませんよ上条さんは。そうやって油断したところでドカンと一発……」
「するか！！　私をそんな風に思ってたんかい！！」
興奮したからか、スパークが起きる。バチン、という音に驚き、バランスを崩す。
「うわっ！？」
そのまま後ろ向きに倒れる。このままでは壁や床に頭を打ち付けてしまう。
咄嗟に片足を下げた。

グニッ

その足にセメントともアスファルトとも違う感触が伝わる。

「……ハイ？」

恐る恐る足元を見てみる。
まさかイヌが出したモノでも踏んづけしまったか？
いつもならそれくらいあり得る。

しかしそこに見えたのは

踝（くるぶし）まで地面に沈み込んだ自分の足だった。

「えっ！？　なに？　なんなんですかコレ！？」
この予想の斜め上をいく現状に動揺する上条。
引き抜こうとするも逆に引き込まれていく。しまいには体勢を保てなくなり尻餅をつくが、なんの衝撃も来ずそのまま沈む。
「アンタ、大丈夫なの！？」
彼と同様に混乱するも、どうにか復活した御坂が呼び掛ける。
「お前、これが大丈夫に見えるか！？」
そうこうしているうちにもう一方の足も地面に取られる。これで下半身が沈んだことになる。
（なんだ？　能力、それとも魔術か？　なんにせよ“異能の力”なら……）
右手を高く掲げ
（幻想殺し（コイツ）で打ち消せるはず！）
振り降ろす。
が

泥水を叩いたかのように
その右手は地面へと潜っていった。

「っ！？」
上条は目を見開いた。
自身の右手で打ち消すことができない。それはつまり
（“異能の力”じゃない！？）
もちろん「人間が地面に沈む」など普通ではありえない。
それなのに能力でも、ましてや魔術でもない。
（ちくしょう！　ワケわかんねぇぞ！？　いったいどうなってんだよ！？）
脳内で悪態を吐きつつ、まだ自由に動かせる首で辺りを見回すもロープやケーブル、パイプなどの使えそうな物はない。
「初春さん！？　今大丈夫！？」
御坂の方を見るとどうやら救援を呼んでいるらしい。電話口から飴玉を転がしたような甘い声が聞こえた。
『御坂さん！？　どうしたんですかそんなに慌てて！？　また白井さんにセクハラされたんですか！？』
「いや、そういうんじゃなくて……」
現在入院中のルームメイト、白井黒子に対して憐れみ半分、呆れ半分の感情を抱く。
「助けてほしいのよ！知り合いが妙な現象に出くわしちゃってさ……」
『えーっと、具体的には？』
「地面に沈んでいってるのよ。表層融解（フラックスコート）の一種だと思うんだけど、近くに能力者はいないし……」
『わかりました。監視カメラで調べますからその場所を教えてください』
「ごめん初春さん。ここ路地裏だからカメラには映らないわ」
『あぅ～。じゃあ大まかでもいいので現在地を教えてください』
「え～と……」
説明しようとしたところで思考が止まる。
ここ、どこだ？

彼を追い掛け、迷路のように入り組んだこの道を無我夢中で走り続けたのだ。道順などいちいち覚えていない。
「ねぇアンタ」
そこでもう一人の当事者へ
「ここどこだかわか――
顔を向け、視界に入った光景に絶句する。

彼は左手を除いた全身を地中に埋めていたのだ。

「ウ、ウソ……アンタ平気!?　息出来てんの!?」
『御坂さん!?　何があったんです!?　みさ――――
通話を断ち切り、急いで彼のもとへ駆け寄る。
地面から生えた左手を掴み、引張り上げようとする。
しかし学園都市で最高峰のレベル5と呼ばれようとも所詮は女子中学生。それも叶わず自身の足も取られる。ずぶずぶと沈んでいく体。
このままいけば誰に気付かれずに失踪することになる。
（せめて手がかりは残さないと……!!）
ポケットからコインを取り出す。正面の建物、正確にはその上部を狙い、コインを弾いた。

瞬間

周囲に衝撃波を振り撒きながらオレンジ色の閃光が鉄筋の壁を穿った。

少しすると、穴の向こうから通行人が騒ぐ声が聞こえてきた。
（よし、後は……）
携帯を取り出し、いくつかボタンをいじる。その間も体の沈没は止

まらない。胸元まで埋まったが、それでも携帯の操作をやめようとしない。
そして地面が喉まででせまったところで携帯を閉じる。
（あとはまかせたわ、初春さん！！）
手首のスナップを利かせて放り投げる。
鞄の上に携帯が着地したとき

路地裏から人の姿は完全に消えた。

そこに残っていたのは二つの学生鞄、カエルを模した携帯電話。

それだけだった。

第０２話　突然の「不幸」（後書き）

次回いよいよ巡り合います。

第０３話　邂逅（であい）（前書き）

やっと出来た……
お待たせしました。第３話です。

第０３話　邂逅（であい）

海鳴市　ＰＭ９：００

それは偶然だった。
いつものように無事に仕事を終え、家に戻る途中。
彼女が不自然な歪みを感じ取った。
初めは管理局の人間かと思った。
けれど違うらしい。
その人からは毛ほどの魔力も感じないという。
いったい何者なのだろう。ヘタをすれば背後から刺されるかもしれない。

正体を確かめる為、
そして万が一に備える為、
すぐに現場へ向かった。

それこそが私たちの「出会い」。
長い長い物語の「始まり」だった。

※※※※※

すべり台やブランコ、鉄棒にジャングルジムが点在する普通の公園。
人の姿はなく、夜の闇を帯びた遊具は不気味ですらある。シンと静まり返ったその場所に

上条当麻は倒れていた。

「ウッ……」

目を覚ます。上体を起こし、辺りを見回す。

「ここは、公園……？」

立ち上がり、すぐに怪我の有無を確認。擦り剥いた箇所もあるが大したことはない。

所持品も確認する。通学用カバンは手元にない。

携帯は無事だが圏外を表示している。

財布も無事だがこちらは元から中身がない。

改めて周囲を観察する。

公園の外には道路が見えるが、人も車も往来はない。

明かりの点いている家もあるものの全体的に静かだ。

なによりもこの公園を含め、草木など自然が多い。

学園都市ではあまり見ない光景だ。

「えーっと確か……」

なぜ自分がこんなところにいるのか。そこまでの経緯を思い返す。

いつものようにビリビリと追いかけっこをして、袋小路に追い詰められ、二言三言話した後、異変は起きた。

地面に飲み込まれたのだ。

底無し沼にはまったかのように足を取られ、そこから動けなくなり、混乱しているうちに全身が沈没してしまい。

そこで意識は途絶えた。

そして今に至る。

状況だけを聞かされ間髪入れずに現場へ飛ばされる、なんてことが

日常茶飯事になりつつある上条でもこれは頭が追い付かない。
なによりも“あの現象”が上条の混乱を加速させた。

「右手が……効かなかった……」

能力でも魔術でも、
幸運でも呪いでも、
果てはこの世に天使を卸す儀式さえも、
そのすべてを例外なく打ち消した“幻想殺し”。
今回それが反応しなかった。

つまり
“あれ”は「例外」の範疇に入る事例ということになる。

「……って御坂？　おーい御坂？　どこにいるんだー？」
巻き込んでしまった少女のことを思い出し、名前を呼び掛ける。
だがなんの応答もない。そもそも人がいない。

「はぁ、不幸だ……」

一人淋しく呟いた。

※※※※※

「あいつだよフェイト。あたしが感じた変なヤツって」
「見たところ普通の人だけど……どこがおかしいの？　アルフ」
公園から少し離れたビルの屋上。
二つの人影がそこにはあった。

金髪の少女、フェイト・テスタロッサ。

彼女の使い魔、アルフ。

二人は“仕事”を終え、家路についていた。その途中でアルフが奇妙な気配を察知、様子を見る為に立ち寄ったのだ。

「フェイト、あいつはなんの前兆も出さないで、いきなりあの場所に現れたんだよ」

「えっ！？」

「それだけでも驚いたってのに、あいつからは魔力らしいモノはなんも感じ取れないのよ」

「そんなムチャクチャな……」

「ヘタすりゃ管理局のヤツらより厄介かもよ……」

「……行ってみよう、アルフ」

「お手並み拝見ってヤツ？」

無言で頷くフェイト。

「あの人には悪いけど……もし必要なら、倒す」

「りょーかい。サポートは任せてよ」

「うん。頼りにしてるよ、アルフ」

屋上から跳躍、一直線に目標へ向かう。

魔力弾を放ちながら。

※※※※※

我ながら運がいいと思った。
手がかりはないかと見渡していると月が目に入り、
なんとなく眺めていると金色の“なにか”が飛んでいるのを発見し、
それが自分直撃コースを辿っていることに気付き緊急避難。
現在、公園の中心部にはクレーターが複数、口を開けていた。
（なんなんですコレなんなんですかこの不幸は！？　やっぱり上条さんはどこ行っても不幸なんですかぁ！？）
遊具の影に隠れながら、心中で自棄気味に叫ぶ。

カツッ

飛来物が来た方向から小さな音が響いた。同時に気配も感じられるようになる。
（誰なんだ？　私なにか悪いことしましたか？）
恐る恐る遊具の影から覗き込む。
出入口近くの街灯の頂上。そこにいたのは一人の少女だった。
歳は小学校中学年くらいだろうか。黒いマントを羽織り、メカニカルな杖を構えた、金髪が特徴的な少女。
と、構えた杖の先端が輝き出す。
「っ！！」
次の攻撃だと察知、遊具から飛び出す。
同時にさっきまでいたその場所に着弾、魔力を撒き散らしながら爆発する。立ち止まらずに動き続けることで被弾を避けるが、相手はその場から動かず際限なく撃ってくる。こちらの方が明らかに分が

悪い。
さらに悪いことにこの魔力弾、ある程度の追尾性能があるらしく、ギリギリまで引き付けないとよけるのが難しい。
と、目の前の少女ひとりに“のみ”集中していた。
「チェーンバインド！！」
どこからとも無く光の鎖が伸びて来て、上条の右足を捕らえる。
「ぬぁっ！？」
思いっきり顔からコケる。
それでも弾幕は途切れない。体を起こし、どうにかギリギリでよける。
が、今度は左手が鎖に捕まってしまう。
次いで左足。
これで体の自由のほとんどを奪われたことになる。現に右上半身以外、まともに動かせない。
そして一本の鎖が伸び、右手を掴んだ。
その瞬間
パキィン、と音をたて
鎖は砕け散った。
「っ！！」
「えっ！？」
初めての光景だったのか、少女から動揺するさまが見て取れる。一方、上条は今の“現象”から仮説をたてる。
（“幻想殺し”が効いてる……？）
試しに他の鎖に触れると先程と同じように砕けて消えた。
（コレに効くってことは……）

少女に目を向ける。
動揺から立ち直ったのか、杖を構え直し攻撃体勢をとる。
彼女の周りに金色のエネルギー体が多数浮かび上がる。
しばらくの間、その場に留まっていたが
「行って！！」
一斉に襲いかかる。
しかし彼は動こうとしない。
魔力弾のひとつが当たる直前、はらうように右手を振るった。

またガラスが砕けたような音が鳴り
魔力弾を打ち消した。

（やっぱり……！！）
上条は確信した。
先の鎖も、今の魔力弾も、“異能の力”。
自身の右手でなら相殺できる。

理解して刹那、一気に踏み込む。
次々と迫りくる光球を打ち消しながら、彼女との距離を縮める。

そして目前まで辿り着いた。
拳を振り上げた状態で。

「フェイト！！」
パートナーが飛び出すも、おそらく間に合わないだろう。
振り下ろされる腕。
目は殺気立っている。
（やられる……！！）
ギュッ、と目を瞑る。そんな彼女に

コツンッ
軽い衝撃が額をおそう。
「……えっ？」
拍子抜けした声が出た。
襲いかかろうとしたパートナーも動きを止めた。

「まったく……地面に飲み込まれたと思ったら見知らぬ場所で目覚めるし、こーやって幼女に襲われるし……。不幸だ……」
さっきまでの気迫は消え失せ、妙に疲れた感じを醸し出している。
「あ、あの……」
「ん？」
勇気を出して話しかける。
「あなたは、何者なんですか？」
「俺か？　一応高校生だけどそっちは？」
気取った感じのしない、自然体の返答がきた。
「わ、私は魔導師……」
「魔導師？　魔術師じゃなくてか？」
「えっと……」
「つーか、ここどこだ？　日本のどこかってのはわかるんだけど」
「あ、あの……」
ここで少女が戸惑っていることに気付いた上条。
「っと、わりぃ。一方的にしゃべっちまって。ってか自己紹介もまだだったよな」
腰をかがめて目線を合わせ、右手を差し出す。
「俺は上条当麻。お前の名前は？」
「……フェイト。フェイト・テスタロッサ」
差し出された手を握り返す。
「あたしはアルフ。フェイトの使い魔だよ」
背後を見れば、声の主である女性の姿があった。

変わった格好をしているがスタイルはよく、出るところはしっかり出ている。なによりも目を引くのは彼女の頭に付いている耳だった。獣耳というやつか、青髪ピアスが食い付きそうなオプションだ。
「どうしたんだい当麻？　あたしの顔になんか付いてる？」
耳に集中していたからか、変に勘繰られた。
「あ、いや、なんでもない」
「そうかい？」
適当に流す。納得できてないのか、こちらを訝しげに見ている。急いで話を切り替える。
「それよりさっきも訊いたけどここってどこだ？」
「えっと、ここは海鳴市っていう街。もちろん日本のなかだよ」
「……俺の知っている日本じゃ、空から奇襲をしかけるような女の子はいませんことよ？　フェイトさん」
これには二人も苦笑するしかない。
「ご、ごめんなさい。突然現れたから警戒しちゃって……」
「悪気はなかったんだ。許してくれないかい？」
「まぁ、それはいいんだけどさ……」
申し訳なさそうに謝る二人をみて、今度はこちらが苦笑してしまう。
「それより、ここがどこか具体的に教えてくれないか？　できるだけ早く学園都市に戻りたいんだけど――って、どうしたんだ二人とも？　なんか浮かない顔して……」
話しながらでもわかるほど、彼女たちの表情は変わっていった。
「ねぇ、当麻……」
ここでフェイトの口から出た言葉は

「『学園都市』って、なに？」

彼にとって予想外のものだった。

※※※※※

上条当麻が公園で戦っていた頃

御坂美琴は路地のまん中で目覚めた。
上体を起こし、まず最初に目に入ったのは建ち並ぶ民家、それと満天の星空だった。
「え～っと確か……」
地面に沈む彼を助けようとして、逆に巻き込まれてしまい、そのまま意識を失って……
「ミイラ盗りがミイラになってどーすんのよ私……」
我がことながら、頭を抱える美琴。
「あ、あの～」
「へっ？」
背後から声を掛けられた。
振り向くと一人の少女が屈みながらこちらを見ていた。
「どうかされたんですか？」
栗色の髪を二つに結わえた、小学生くらいの可愛らしい娘だ。肩にはフェレットが乗っている。
「道のまん中で倒れてたから、どこか具合悪いのかなって思ったんですけど……」
「えっ？　あ、ああごめんね？　　なんか心配させたみたいで。
　大丈夫、なんともないから」
立ち上がり、手足を動かして状態を確認する。幸いなんともないようだ。
少女を気にさせまいと明るく返すが、彼女も引き下がらない。

「あの、なんでこんな所で倒れてたんですか？」
痛いトコロを突かれた。
美琴自身、なにが起きたのか正確に把握していないのだ。
なので
「う～ん、気付いたらこうなってた、ていうかなんというか……」
ありのままに適当に、はぐらかす。
少女には悪いと思うが、嘘は言ってない。
「は、はぁ……」
呆気にとられる少女。
「それよりここってどこ？　学園都市じゃ見ない風景だけど……」
一気にまくし立て、この場を去ろう。美琴の思惑は、
脆くもくずれ去る。

「あの～、『がくえんとし』ってなんですか？」
「えっ！？　知らないの！？　“あの”学園都市よ！？」
「ふぇ！？」
いきなり大声をあげた美琴に少女は驚いた。

学園都市。
東京の三分の一に相当する面積を有し、住民の八割が学生という、
まさに“学園で構成された都市”。
外界と隔絶された内部では、最先端の科学技術の研究・実験が行われている。
“授業（カリキュラム）”もその一つ。
薬品投与や催眠術、電気ショックなどで脳を開発。
その結果、被験者たちは通常ではありえない“能力”を発現した。
『学園都市に入れば本物の超能力が得られる』
それが世間の持つイメージだろう。
それ故、知らない人はそういない。

“御坂美琴がいた世界”ならば。
「ホントに、知らないの？」
「……はい」
申し訳なさそうにうなだれる少女。この娘が嘘をついているとは思えない。
「あの、すいません」
ここで第三者の声が交じる。
幼い印象を受ける男の子の声――なのだが辺りを見回しても人の姿がない。
「ここです、ここ」
よく聴くと声の主は少女と同じ方向にいるらしい。
そちらに目を向けると
「ほら、ここです。わかりますか？」
フェレットが両手を振りながらしゃべっていた
「……」
あまりのことにフリーズを起こす美琴。
「驚かせてしまってすいません。僕はユーノ・スクライア。あなたと同じく、ここではない別の世界から来た者です。立ち話もなんですから場所を移しませんか？　もう少し詳しく事情をお訊きしたいので……」
「へ？　え、ええ。いいけど……」
復活しつつある美琴だが、まだ思考速度はおぼつかない。

「だったら私のうちはどうですか？　もう遅いですし、お母さんに言えば泊めてくれると思いますよ」
トントンと進む二人（？）の話。
断ろうとした瞬間にふと悪い予感がよぎった。
自分の持っているこのカードは使えるのだろうか？
ホテルに泊まろうと思ったが、どうやらここは平行世界、パラレルワールドらしい。
財布は無事だったものの、中に入っているお金やカードがこの世界で使える保証はどこにもない。ヘタすると無一文ということになる。せめて“ここ”の情勢を把握できるまで頼れるトコロは頼っておこう。

「じゃあ、お言葉に甘えてお世話になろうかしら。これからよろしくね、え～っと……」
ここでお互いに自己紹介していないことに気付く。
「私は高町なのは、小学3年生です」
「なのはちゃんね。私は御坂美琴、中学2年よ。改めてよろしくね」
「こちらこそ、よろしくです」
笑顔で握手を交わす。
「そういえばなのはちゃん」
ふと思い出し、問い掛ける。
「はい？」
「こんな遅い時間になにしてたの？　小学生が出歩く時間じゃないよね？」
これに対してなのはは
「え～っと、そのあたりも説明します」
にゃはは、と苦笑気味に答えた。

※※※※※

こうして出会った４人。

この出会いが

人に物に

様々な変化をもたらしてゆく。

第０３話　邂逅（であい）（後書き）

ただ今必死に各設定を振り返っております。
おかしな所がありましたら指摘していただけると幸いです。

第０４話　「把握」と「混乱」（前書き）

大分かかっちゃいました。
待っていた方、お待たせしました。
第４話です。

第０４話　「把握」と「混乱」

「はぁ……」
第一七七支部。
風紀委員（ジャッチメント）の詰め所であるこの場所で初春飾利は溜め息をついた。

理由は言わずもがな、先の御坂との電話だ。
会話の途中でいきなり切れたため心配になり、発信基地から現在地を特定、監視カメラの映像をくまなくチェックするも彼女の姿を見つけることは叶わなかった。

直後、通報が入った。

轟音をあげながら、オレンジ色の光が空へ消えたという。

（これって……）
初春には心当たりがあった。
その光を何度か間近で見ている。
それができる人物は一人しかいない。

一つ上の先輩にして親友でもある
（御坂さん……！）

現場もさっきまで調べていた場所と一致している。
この二つが無関係とは思えない。

受話器を置き、初春は急いで部屋を出た。

※※※※※

「ダメね。これ以上はなにも見つからないわ……」

現場とされる路地裏。
数人の風紀委員や警備員が捜索しているなか、レベル3の透視能力を持つ固法美偉は初春にそう告げた。
「そ、そんな……」
「現場(ここ)にあったのは学生鞄二つにこれだけよ」
固法は初春にあるものを手渡した。
「これ、御坂さんの携帯です……！」
彼女お気に入りのキャラクター、ゲコ太を模した携帯電話。
間違いなく御坂美琴のものだ。
さらに片方の鞄にもカエルのストラップが付いている。

ここまで来れば何が起きたのか目星はつく。

学園都市から二名失踪。
そのうち一人はレベル5は第3位、超電磁砲(レールガン)の御坂美琴。

「なにがあったのかしら……？」
誰もが思っていることを固法は口に出した。
「わかりません。けど御坂さんは手掛かりを残してくれました」
「そうね……」
初春の発言に応じて固法は後ろを見上げた。

そこには大穴を開けた壁があった。

通報から考えると超電磁砲で開けられた穴。
この場所のことを知らせる為にやったのだろう。

光と音は大勢の人の印象に残せる上、穴の角度からより詳細な位置も割り出せる。
なによりも大きいのは
「この携帯、ですね……」
「そうね。転んでもタダでは起きない、ていうのは御坂さんらしいわね」
「はい。もしかしたらカメラで犯人の顔を撮ってるかも……」
操作しようと携帯を開く。
「あれ……？」
「どうしたの？」
「ロックされてるんです。パスワードを受け付けないくらい強力なのが……」
「えっ！？」
中の情報を守りたかったのか、これ以上はない程ガッチリとプロテクトが組まれていた。
「けど、なんで彼女はこんなモノを残したのかしら……？」
確かに、これでは肝心の中身が確認できない。鍵もダイヤルもない開かずの金庫と同じだ。
無理にいじれば消えてしまう可能性だってある。
「固法先輩。この携帯、お借りしてもいいですか？」
「かまわないけど……どうするの？」
「支部に持ち帰ってデータを解析してみます」
「っ！？　できるの？」
「はい。たぶん私なら、というか私にしかできないと思います」
一見すると頼りなさげな初春だが、こと情報解析・システム管理においては比類無き実力を発揮する。
第一七七支部のセキュリティを一任されるあたり、その才能の高さが窺える。
「まぁ、あなたがそう言うなら、それは任せるわ」
「ありがとうございます！」

謝辞を述べると、そのまま支部へと走って行った。
「なんだか……いやな予感がするわね……」
固法の呟きは、誰の耳にも届くこと無く、空へ消えていった。

※※※※※

「魔法少女？」
「はい。それでユーノくんのお手伝いをしているんです」

海鳴市ＰＭ９：１５

高町家でお世話になることになった御坂美琴。初めは驚かれたが、「家庭の事情で住む所がなくなった」と言うと快く迎えてくれた。お風呂ももらい、現在なのはの部屋にて互いの境遇を話していた。
「へぇ……ってことは、カナミンとかプ○キュ○みたいなことしてるんだ？」
「えっと、たぶんそうだと思います……」
若干際どい質問をかます美琴に、詰まりながら答えるなのは。「カナミン」が何なのか知らないが、これでハッキリした。
「やっぱり、美琴さんは違う世界の人なんですね……」
「そうみたいね……」
聞き慣れない単語が次から次へと飛び出した。
「御坂さん。たしか地面に飲み込まれた、って言いましたよね？」
「へ？　あ、ええ……」
突然のユーノの問い掛けに戸惑う美琴。まだ「フェレットがしゃべる」ことに慣れないでいる。

「もしかすると御坂さんは“ひずみ”に巻き込まれたのかもしれません」
「“ひずみ”？」
「はい」

彼曰く、平行世界とはそれぞれ閉鎖された空間であるらしい。その広さや時間の流れなどが規則性を生み出し、ボールのような「ひとつの世界」を形作っているという。
通常ならばこの状態を永久に保つ。
そこになんらかの要因が影響し、規則性に誤差を生じさせる。

それが“時空のひずみ”。

発生した“ひずみ”は世界が持つ規則性の慣性が働き、「上書き」して消すそうだ。

「……って、ちょっと待って」
ここで美琴が割り込む。何やら不穏な単語が出てきた気がした。
「今“ひずみ”が消えるって言わなかった？」
「ええ。そうしないとその世界が崩壊してしまいますから……」
「なっ！？　それって元の世界に戻る手がかりが無くなった、てことでしょ！？　私帰れないの！？」
焦りからか、両手でユーノを握り締める美琴。なのはと二人でどうにか宥める。
「お、落ち着いてください美琴さん！！　方法なら他にもあるはずです！！　だよね、ユーノ君！？」
「くる、苦し、い……は、放し、て……」まさに命懸け。気のせいか、ギリギリギリといやな音が聞こえる。
「あ、ごめんごめん！」
彼を絞殺しかけていることに気付き、力を緩める。

「それで方法ってあるの？」
むせているユーノに尋ねる。
「いえ、それがなんとも……。一度“ひずみ”の発生要因を調べてみないと……」
「どうやってやんのよ～～～～！！」
締め付けにシェイクが加わった。
「た、たす、助けて、な、なのは～～」
徐々に顔を青くしていくユーノ。
「ユーノ君！？　美琴さん落ち着いて！！　ユーノ君が死んじゃいます！！」
彼女が正気を取り戻すまでの１０分間、彼は延々と振られ続けたという。

※※※※※

一方、フェイト達から話を聞き、ここが異世界だと知った上条当麻。
そんな彼の第一声は

「ああ、やっぱりそうか……不幸だ……」

言葉のわりに悲壮感がない。表情もどことなくスッキリした感じだ。
「あの、当麻……？」
「ん？　どうした？　フェイト」
「ここ、異世界なんだよ？」
「？　そうだけど……それがどうかしたか？」
平然とした様子で答える当麻。
「いや、普通は慌てたり取り乱したりする場面なんだけどねぇ……」

アルフも呆れてしまう。
「あ～、波乱の高校生活だったからな……こういうのに耐性がついちまったんだろうな……」
ありがたいのか悲しいのか、正直わからない。
「波乱って……どんなことしてたんだい？」
「え～っと、腕ぶった切られたり、粉塵爆発に巻き込まれたりしたなぁ。あと殺人犯に命狙われたりも……」
「波乱どころか凄惨じゃないか！！　よく今まで生きてこれたねぇ！？」
興味本位で訊くんじゃなかった。アルフは本気で後悔した。
「ねぇ、当麻はこれからどうするの？」
「俺か？　う～ん、とりあえず情報収集だな。ここがどういうトコなのか調べたいし、ビリビリの居場所なんかも把握しとかないと……」
「そうじゃなくて、泊まる所とかってあるの？」

「……あっ」

最重要課題を失念していたらしい。
なにをするにも拠点が必要になる。しかし当麻の所持金はゼロ。明日一日を過ごせるかも怪しい。
「ふ、不幸だ……」
異世界に迷い込んだと聞いたときより落ち込んだ。

そこへ
「当麻、泊まる所がないなら私の家に来る？」
救済の声が舞い込む。
「はい？」
今の言葉をうまく飲み込めない当麻。
「さっきはいきなり襲い掛かっちゃったから……その、お詫びした

いし……」
「いや、その申し出はありがたいけど、大丈夫なのか？　突然押し掛けるような形になるし、フェイトの両親には迷惑なんじゃないか？」

刹那、フェイトの顔が辛そうに歪んだ。
しかし、当麻が察する前に表情を戻す。

「平気だよ。母さんは別の所で暮らしてるから、私とアルフの二人しかいないよ」
「そういう環境で見ず知らずの男を泊めるのはいかがなものかと上条さんは思うのですが……」
これはこれで不安になる。
「心配しなくていいよ当麻！　フェイトにヘンなコトしようとしたら、あたしがブッ飛ばすからさぁ！！」
「確かに安心ですけど、俺が特殊趣向の持ち主であること前提で言うのはやめていただけませんか！？」
もちろん彼にはそういった気質はない。
「冗談だよ。あんたのことは信じてるからさ」
ケラケラ笑うアルフに
「うん。当麻はそんなことしない、ってわかるから」
微笑みながらこちらを見据えるフェイト。
「はい？」
いつ二人の信用を勝ち得たのだろうか。
首を傾げる当麻に対して告げられたのは
「さっきの戦いでフェイトを殴らなかったからね」
という些細なものだった。

「……それだけで？」
「ううん」

首を振るフェイト。長い金髪が宙になびく。
「自己紹介のとき、当麻は私に合わせてかがんでくれたでしょ？
そのとき思ったんだ」

「当麻は優しい人なんだな、って……」

買いかぶり過ぎだと思った。

けれど

正直、嬉しかった。

「それでどうするんだい当麻？」
アルフが尋ねてくる。
当然、答えは決まっている。
「そうだな。しばらく世話になるか……」
そう言って差し出した右手を
「これからもよろしくな。迷惑掛けないようにするからさ」
「うん、よろしくね当麻」
彼女は強く握り返した。

※※※※※

二人が異世界でそれぞれの出会いを果たしていた頃

「はぅ〜、やっと出ました〜」

初春飾利は自身に課した任務を果たしていた。
固法から許可をもらい、御坂の携帯に対してクラッキングを敢行、つい今しがた突破に成功したのだ。現在、必要な情報を採取している最中である。

「それにしても……」
防壁の厚さ・組み方、罠の配置にその起動条件、さらには暗号化に使った乱数もランダムにランダムを重ねた仕様。
３０分や１時間で作ったには出来すぎな位の完成度。電撃使い（エレクトロマスター）の最上位、超電磁砲の名は伊達ではない。
しかもこのセキュリティ、それなりの技術と経験があれば破れなくはない強度なのだ。おそらく、初春の為にある程度加減したのだろう。

「さて、っと……」
採取終了。データを開けてみる。
最初に出たのは画像だった。
ツンツンとした黒髪が特徴的な、高校生ぐらいの男子一人が写っている。下の部分に「上条当麻」と書かれている。出席簿のデータから引っ張ってきたらしい。
現場に鞄は２つあった。一方は美琴のものと断定できたが、もう一方の鞄には持ち主を特定できるものがなかった。取手の指紋も調べたが、にじみやこすれが激しく人物特定には至っていない。
上条当麻。彼が二人目の失踪者なのだろう。

次に出たのはテキストデータ。内容は
“上条当麻
都市伝説

無能力者”

これだけだ。彼女は何を伝えようとしたのか。

「都市伝説？　あれ？　そういえば御坂さん……」

夏の頃だったか、白井や佐天と都市伝説で盛り上がったことがあった。

科学の集結体と言える学園都市でオカルト、と聞くと違和感を覚えるかもしれないが、実はそうでもない。

むしろ大量の“未知”が横行するこの都市にはその手の話は捨てても気付かない程ある。

曰く、所かまわずいきなり服を脱ぎ出す“脱ぎ女”がいる。

曰く、使うだけでレベルが上がる“幻想御手（レベルアッパー）”がある。

この二つも都市伝説として噂されてたもの。

だが、ガセではなく実際にあった話だ。

美琴は“脱ぎ女”に遭遇しているし、“幻想御手”は佐天が巻き込まれたこともあり、忘れることは出来ない。

そんな虚実いり雑じる噂のなか、美琴が熱心に見ていたものが一つ。

“どんな能力も打ち消す能力を持つ男”

胡散臭さこの上ない噂だが前に挙げた話が実在したなら、これだってその可能性がある。

「だとしたら、この人が……？」

疑わずにはいられない。

画像に添えてあった名前で書庫（バンク）に検索。

結果、わかったのは無名と言ってもいい普通高校の生徒ということ。

しかも彼がなんの能力も持たないレベル０であること。

能力を打ち消す、なんて芸当ができる訳ない。
しかし美琴のメッセージを繋げると、彼がその力を持っていることになる。
だが、身体検査では毎回同じ結果を叩き出している。
それでは彼女が残したあのメモは一体なんなのか。

「はぅわ〜〜」
余計に混乱してしまう。

「ホントなにがあったんですか御坂さぁ〜ん……」
机に突っ伏しながら、大きな独り言を吐く初春だった。

第０４話　「把握」と「混乱」（後書き）

なのはとフェイトが出会うまで、　上条と御坂が再会するまで、もう少しかかると思います。
長い目で見守っていただけるとありがたいです。

第０５話　各人の行動（できること）　［前編］（前書き）

楽しみにしてた方、すみません。
地名、一人称などの訂正などもやってたらこんなことに……。

第０５話　各人の行動（できること）　［前編］

翌日。

落ち着きを取り戻した美琴は情報収集、及び上条当麻の捜索に重点を置き、市内を散策することにした。

ユーノの話では、巻き込まれたならこの世界にいる可能性が高いという。

さらになのはに訊いてみたところ、この世界で使われている通貨は美琴の世界のモノと全く一緒とのこと。当分の間はどうにかなりそうだ。

「それじゃあ、行ってきますね美琴さん」

「気を付けてね？　なのはちゃん」

「はい！」

「なのは、ボクは御坂さんと一緒にあちこち回ってみるよ」

「うん、わかった。ユーノ君たちも気を付けてね？」

「言われなくてもわかってるよ」

「それよりほら、時間のほうは大丈夫なの？」

「ふぇ！？　い、いってきま～す」

慌ただしい朝。学校があるなのはを見送りさあ計画実行、という矢先

「いたいた、美琴ちゃん？」

背後から呼び掛けられた。

「あ、はい」

振り向いた先には恩人であり、なのはの母でもある高町桃子が洗濯物を抱えながら立っていた。

「これ、手伝ってくれないかしら？」

「いいですよ。喜んで」

駆け寄って洗濯物を受け取る。

「ごめんなさいね、お客様にこんなことさせて……」

「いえ、私の方も泊めていただいた身で何もしないってのはどうかと思ってたので、気にしないでください」
「あら、そう？　じゃあこっちもお願いしようかしら」
美琴の腕にドカドカと洗濯物が積まれていく。
「ふぐっ……！」
想定以上の追加重量に潰されそうになるも、持ち前の負けん気でどうにか堪える。
「えっと、大丈夫？　重くない？」
「へ、へ～きでぇ～す……」
よろめきながら庭に向かう。

（出掛ける体力残るかな）
不安な美琴だった。

※※※※※

「探し物？」
「うん。あちこち行くから、よかったら一緒にって思ったんだけど……」
「もちろん、あたしらと別行動にしたいってんならそれでもいいよ」

こちらは当麻、フェイト、アルフの三人組の会話風景。
朝食前に今日の予定を考えていた当麻だったが、フェイト達からそんな提案を持ちかけられた。
海鳴市に対して土地勘のない彼にとっては、この上なく魅力的だが
「いや、出掛けるってお前学校はどうすんだ？」
それが気に掛かる。
見た所、フェイトは9、10才くらいか。カレンダーを確認したが

今日は平日だ（物価や生活文化だけでなく、日付まで元の世界と同じだった）。学生児童である以上、勉学の義務があるはずだ。
しかし、その返答は
「私、学校に通ってないよ」
アッサリしたものだった。
「通ってない……？」
「うん。私もアルフもこの世界の人間じゃないから」
「はぃ！？　それって……」
「そういうこと。あたしらも当麻と一緒ってわけ」
確かに獣耳が付いた人間はいない。この世界特有の人種かと思ったがテレビを見る限り、そうではないらしい。
「そうまでして、お前らが探してるモノってなんなんだ？」
わざわざ時空を超えているのだ。彼女たちの目的が知りたい。
「えっと、『ジュエルシード』っていうのを集めてるんだけど……」
「けど？」
妙に歯切れが悪い。
フェイトに続けてアルフが説明する。
「見つけにくい上に、いかんせん数が多くてね。どうしようか悩んでたトコロに……」
「俺が来た、って訳だ」
当麻の言葉に二人は同時に頷く。
「正直、あまり気は乗らないんだよ。危険なことが多いからね」
「けれど、私とアルフの二人だけだと、どうしても手が回らない場所があるの」
ここでフェイトは言葉を切り、当麻の目を正面から真摯に見つめた。
「無理強いはしないから。どうするか、決めてほしいの」
ここまで聞いて彼の口から出てくる答えは一つ。
「わかった。俺も手伝うよ」

「えっ！？」
「本当かい当麻！？」
二人とも机に身を乗り出し、彼に迫る。
急接近した彼女らに、若干顔を引きつらせる当麻。
「あ、あぁ……これから先も世話になるだろうし、それで何もしないってのもどうかと思う訳で……」
「だからって即答するかい普通？」
理由を述べる彼に呆れるアルフ。
「本当にいいの？　危険なこと、怪我だけじゃ済まない場合だってあるんだよ！？」
「“だからこそ”、だよ」
「えっ？」
「危ないっていうからこそ、手伝いたいんだよ」
「？」
普通は逆ではないだろうか？
彼が言いたいことがわからない。
「そういうアブネーコトを、お前らは二人だけでやってきたんだろ？」
「う、うん」
「まぁ、事情を話せなかった、てのもあったんだろうけどよ、こういう時は他人（ひと）に頼ったっていいんだよ」
諭すように、優しく語り掛ける当麻。
「お前は女の子で、ましてや子供だろ？　つらくて悲しくて、押し潰されそうになったら、誰かに甘えたって文句いうやつなんかいねぇよ」
「でも、その人の迷惑になるんじゃ……」
「俺はそう思わねぇ。むしろ無理される方が俺的にはつらいな。あなたじゃ力不足です、て言われてる感じでさ……」
だからさ、と当麻は一拍置き、

「絶対、一人で無茶しないでくれ。
俺に出来ることなんて、たかが知れてるけどさ、それでもお前らの力になりたいんだ」
まっすぐとフェイトの目を見据え、自身の思いを放った。

最初はキョトンとしていたが瞳の奥、そこにある力強さから彼の覚悟を悟った。
「うん、わかった。けど当麻もムチャしちゃダメだよ？　私も心配してるんだから」
「ああ、約束だ」
フェイトに小指を立てた手を差し出す。
彼女も自身の指を絡め
「ゆーびきーりげーんまーん……」
互いの決意を誓いあった。
「さてと、そうと決まれば捜索開始と――」

グ～～ッ
当麻の腹から、高らかに虫が鳴いた。

「――行く前に腹ごしらえだな……」
「だね……」
苦笑するフェイトとアルフ。
さっきまで凛々しくキメてた顔はどこへ行ったのか、こうしていると普通の高校生にしか見えない。
ただ一つの特異点を除いて。
「そういえば当麻。私の魔力弾、どうやって消したの？」
昨日から気になっていたのだ。
そういった攻撃魔法に対しての防御陣はあるが、その類のモノを彼

は発動していなかった。
「あれ？　言ってなかったっけ？」
呟くように言うと、当麻は右手を胸の高さまで持っていった。
「俺の右手には幻想殺し（イマジンブレイカー）ってチカラが宿ってるんだ」
「イマジン、ブレイカー……？」
「超能力や魔術に呪い、神様の創った奇跡（システム）……それがワケの分からねぇ“異能の力”なら、この右手は打ち消せるんだ」
「えっ……！？」
「あ。やっぱ信じられないってカオしてるな」
無理もない。
魔力を使って戦う魔導師にとって、それは最強にして最凶の能力を意味するからだ。

全ての攻撃を無効化し

あらゆる拘束を振りほどき

堅固な防壁を突き破る。

もはや反則ともいえる強大さに、実際に見たフェイトとアルフでも飲み込みきれないでいた。
「そんな力、いったいどこで手にしたんだい？」
アルフがそう尋ねた瞬間、当麻の表情がこわばった。
「どうしたんだい当麻？　口止めされてて言えない、ってやつかい？」
「いや、そういうんじゃなくてだな……え～っと……」
どうも歯切れが悪い。答えづらい質問ではないと思うのだが。
互いに顔を見合わせ、首を傾げる。
やがて意を決したのか

「二人とも、今から俺が言う事は他の人に――特に俺達の世界の人には、絶対に言わないでほしいんだ」
と、聞いてきた。
「？」
「約束できるけど……どうして？」
「それについても説明するからさ、その前にまず一つ、知ってほしい事があるんだ」

「俺、記憶喪失なんだ」

※※※※※

「はい……はい……すいません、引き続きお願いしますですー」

とある高校の職員室。
受話器を置いたちびっこ先生こと月詠小萌は頭を抱えた。
「どうしたじゃんよー？　小萌センセ」
そこへ、緑ジャージ姿の黄泉川愛穂がやってきた。
「あー黄泉川先生。実はですねー……」
カクカクシカジカ、と電話で告げられた内容を伝える。
「“また”上条当麻じゃん？」
「……はいですー」
第一声がコレ、というのも悲しい話だが事実、小萌の教え子である上条当麻は行方不明だ。
常盤台の超電磁砲と鬼ごっこしていた、なんて目撃情報もあったが、夕方以降の足取りは掴めていない。

「午後になれば警備員（コッチ）にも通達がくるはずじゃん。あたしらも全力で捜索するから安心するじゃんよ」
「……わかりました。おまかせするですよー」
出来ることと言えば、無事を祈ることのみ。
歯痒いが警備員に託すしかない。
「……にしても、今度は何に巻き込まれたじゃんよ？」
夏休みを過ぎた辺りからか、上条当麻の欠席日数――というより入院日数は飛躍的に増えた。
入学したときからやんちゃしていた彼だが、月に一度は入院する、というのは彼の不幸体質故か。
だが不明瞭な事件のなかで断言できることがある。
「きっと今回も女の子が絡んでいるに違いないんですよー！」
月詠小萌。
彼女は上条当麻をよく理解している。

※※※※※

所変わって、とある男子寮。
土御門舞夏はいつものように義兄である土御門元春の部屋へ向かっていた。
彼の部屋は、ほっとくと3日でキノコが生えそうな環境になる。
だから、こうして定期的に掃除しにいくのだ。
ついでに隣人である上条当麻の居候、インデックスの話し相手もする。

「んっ？」

目的地の手前、上条当麻の部屋の前に白い布が転がっている。
所々に金の刺繍が入れられている。
「どうしたんだー？　インデックスー」
目の前の白い布、改めインデックスに話しかける。
「ォ、――――――」
最期の力を振り絞り、発した言葉は

「おなかへった」

食欲魔神たる彼女らしいものだった。
「……」
さしもの舞夏もどう反応すべきか、困惑してしまう。
それ以降、インデックスはピクリとも動かなくなった。

が、

「えっとー、インデックスー。上条当麻はどうしたー？」
彼の名前を出した途端、ガバァッ、と勢いよく起き上がった。
「そーなんだよ！　きーてよまいか！　とうまってば、昨日の夜から全然連絡くれないんだよ！」
「？　……昨日から？」
「そう！！　いくら待っても全然帰って来ないんだもん！！　このままじゃ飢え死にしちゃうよ！！」
彼女、食う量は規格外だが、家事はからっきしである。
（んー？）
内心で首を傾げる舞夏。
上条当麻は同居人を放って遊び歩く無責任な男ではない。
むしろインデックスを優先で生活していた、といっても過言ではな

い。
そんな彼が連絡も寄越さずに、行方をくらましている。
そして彼は超絶的な不幸体質。

つまり

「インデックスー、それってヤバくないかー？」
「へっ？　なんで？」
「上条当麻のやつ、またなにか事件に巻き込まれたんじゃないかー？」
「……」
どうやら自分は、またも置いてきぼりをくらったらしい。

「とうまーーーーーーーーーーー！！」

彼女の絶叫は虚しく消えていった。

その後、舞夏からごちそうになり、飢えを凌いだインデックス。しばらくは小萌の家に厄介することとなった。

第０５話　各人の行動（できること）　［前編］（後書き）

長くなりそうだったので、分けることにしました。
続きは急いで仕上げるつもりです。

では、次回をお楽しみに！！

第０６話　各人の行動（できること）［後編］（前書き）

２ヶ月かかってやっと一話。
時間かけ過ぎました。

申し訳ございません。

第０６話　各人の行動（できること）［後編］

「さっそくコレかよ……不幸だ……」

上条当麻は道に迷っていた。

家を出た時は、確かにフェイト達と一緒だった。
数分後、当麻の側頭部にピンポイントで野球ボールが直撃。
軽い脳震盪を起こし、フラついた拍子に転がっていた空き缶を踏んづけ転倒。
なんとか立ち上がるも足に力が入らず、今度は生け垣へと突っ込み、その家の盆栽を破壊。
直後、玄関から災誤にも勝るとも劣らない風貌の老人が登場、雷が落ちる前に決死の逃亡。

結果、二人とはぐれてしまった。

「チクショー……ここどこなんだよ……？」
逃げることに必死だった為、現在どの辺りにいるのか、さっぱりわからない。
遠くに海が見えるが、土地勘のない当麻には意味をなさない。
適当に歩くのもどうかと思い、周辺を見回す。

「あっ」

２０ｍ先に公園を見つけた。
普通の公園ではない。

昨夜、フェイト達と出会い、ドンパチとやらかしたあの場所だ。

「……あれ？」

そう。

確かにドンパチとやらかしたのだ。

遊具はハデに壊れたし、地面にクレーターも作った。

なのに、警察の姿や規制が敷かれた様子はない。

気になって覗き込む。

「はいっ？」

そこにあったのは

新品の遊具が置かれた

何のへんてつもない公園。

それだけだった。

※※※※※

ＡＭ１１：３０

「見つからないわねぇ……」

「まだ探し始めたばかりですし、もう少し頑張りましょう。御坂さん」

桃子の手伝いを終え、市街地へと繰り出した美琴とユーノ。

この街にいると思われる上条当麻を発見する。
それが現在の目的だ。

平日である為、学生が歩いていれば目立つし、黒髪のツンツン頭という外見に加え、「不幸だぁー！」という声があれば、確実にそこにいると断定できる。
すぐに見つけられるだろう。

と、思ったが甘かった。

いるのは、仕事・家事で忙しく駆け回る人々のみ。
学生もいるが、学校をサボっている不良ぐらいだ。

で

「キミ〜、ヒトリ〜？」
「この辺じゃ見ない制服だよね？　ドコの学校？　転校生？」
「迷ってるなら俺らが案内しようか？」

前の方から、数人の男子が声を掛けてきた。
俗にいうナンパである。
（うっ……厄介なのに絡まれたわね……）
内心でボヤく美琴。
常盤台中学というブランドとそのルックスから、学園都市でも同じように声を掛けられた。
そういった輩は電撃で黙らせたが、ここは言わば“外”の世界。
超能力が普通ではないこの世界でヘタに騒ぎを起こすワケにいかない。
どうしようかと悩んだが、妙案を思い付く。
「あ、あの〜、ヒトを探してるんだけど……」

「ヒトだぁ？」
「うん。ツンツンした黒髪で、『不幸だ～』っていうのが口癖なんだけど……」
「オマエら、そんなヤツ見たかぁ？」
一番近くにいた男が後ろを向き、仲間に問い掛ける。
「知らねーよそんな奴」
「オレも」
「そんなヤツ、いたんなら忘れねーっつの」
「だとよ」
再び美琴の方へ振り向き、卑下た笑いを浮かべながら告げた。
「そ、そうですかぁ。すいませ～ん、お手数お掛けしました～」
もしかすればと思ったが、空振りとなった。
これ以上関わる必要はない。そそくさと立ち去ろうとする。

が

「待ちなよ」

肩を掴まれる。
驚いたユーノが襟足に隠れてしまった。
（うっ！？　やっぱ、こう来たか……）
あまりにも予想通りな展開に頭痛を覚える。どこであっても、この手の人種は同じ思考回路を持つらしい。
「そんなヒトをほったらかすようなヤツなんて忘れてオレらと遊ぼうや」
美琴の心情お構いなしに話を進めるリーダー格の男子。
いつの間にか、他の不良達が自分を囲むように立っていた。
周りには、コチラを見て見ぬフリをする通行人。

いつかの光景を思い出すシチュエーションだ。
その時もこうやって不良に囲まれた。
通行人も見るだけで助けようとしなかった。
彼らが弱いのではない。
こちらも助けを求めた訳ではない。

（またコレか……）

落胆していたとき

アイツは現れた。

待ち合わせに遅れ、相手を連れていく体（てい）で逃がそうとした。
しかし、うまくいくハズもなく作戦は失敗。
不良がせまるなか、彼は啖呵を切った。
（こんなヤツもいるんだ……）
感心した瞬間

“反抗期の抜けてない子供”などと言われた。

本人は必死に相手を説いているつもりだったろうが、堪ったモノではない。

腹イセに電撃をブチかました。気絶させる程度だが、それなりに威力はある。

バタバタと不良が倒れるなか

彼は無傷で立っていた。

腐れ縁はその時からだ。

声を掛ける度に無視され

勝負を挑む度に軽くあしらわれ

対決できたと思えば手加減され――

「……」

なんだかハラが立ってきた。

バチバチと音を立てる青白い閃光。

不良達も顔色を変える。

さすがにつらいのか、肩に乗っていたユーノが逃げる。

そして

「ぁんのバカがぁ～～～～～～ッ！！」

爆発した。

彼女が正気を取り戻したときには、アフロヘアー三人組が倒れていた。

※※※※※

「当麻ってば、ドコ行っちゃったんだろうねぇ……」
「そんなに遠くには行ってないと思うんだけど……」

取り残される形となったフェイトとアルフ。

アルフの鼻を頼りに探しているが、彼の姿を捉えることはできていない。

「当麻、大丈夫かなぁ……」
この街に慣れていない当麻を心配するフェイト。
「平気だって！　当麻もコドモじゃないんだから」
「そうなんだけど、さっきみたいな事になってないかなって……」
それを聞いて先程の出来事を思い出す。
続けざまに彼に襲い掛かる、ありえないまでのハプニング。
昨晩、彼も言っていたが“幻想殺し”の影響か、不幸なことが多いらしい。

「……まぁ、大丈夫でしょ」
「うん……」

気を取り直し、捜索を再開した。

その矢先
「っ！！」
ある気配を察知する。
「フェイト、ジュエルシードだ」
「えっ！？」
「それもかなり近い」
「急ごう、アルフ！」
バルディッシュを取り出し、フェイトは駆け出した。

※※※※※
とある公園のベンチ。
歩き疲れた当麻はここで休んでいた。
と、同時に目の前の光景について考えていた。
この公園の遊具も
その配置も
周りの景色も
この世界で初めて見た光景だ。

そして、この場所でフェイトたちと戦った。
その際、流れ弾が着弾し、遊具もなにも壊れたのを覚えている。
それなのに、今ここで子供たちが遊んでいる。
「どうなってんだよ、いったい……」
倒壊するビルを言葉一つで元に戻した黄金錬成（アルス＝マグナ）を見た事はあるが、それでも信じられない。
「元気だなー、子供って……若いっていいなぁ……」
しまいには現実から逃げる始末。
と
「ウウ……ヒッグ……」
泣いている女の子を見つけた。
立ち上がり、彼女の元まで歩く。
「どうしたんだ？　お母さんとはぐれたのか？」
腰を下ろし、優しく問い掛けた。
そんな当麻の心配りを感じてか、はたまた彼のフラグ体質の成せるワザか、少し落ち着きを取り戻した少女は上を指差した。
「あのね、ボウシがね……」
「帽子？」

倣って見上げると、白地にピンクのリボンが巻かれたツバ広の帽子が、枝に引っ掛かっていた。
わりと高い場所らしく、当麻が手を伸ばしても届かない。
ジャンプして指先が軽く触れる程度。何度か試してみるがなかなか掴めない。

「待ってろよ、今取ってやるからさ」
「うん、ガンバッテお兄ちゃん！」

そして奮闘すること5分、

「よっし！！」

見事掴み取ることに成功する。

「ほら、今度は飛ばすなよ」
「うん！　ありがとうお兄ちゃん！」

満面の笑みで帽子を受け取り、友人のもとへと駆けていく。
その姿を見届けていると

「へぇー、アンタの守備範囲には幼女も入ってんだ、へぇー……」

背後から聞き慣れた声が響いた。

振り返る。そこにあったのは

「よかった！　無事だったか、ビリビリ！」
「だからビリビリゆーな！！」

フェレットを肩に乗せ、気品爆発の常盤台中学の制服を纏った御坂美琴の姿だった。

※※※※※

「ふーん、そんな事がねぇ……」

「展開が急過ぎて、まだ混乱してっけど……今、確実に言えるのは……」

「「すぐには帰れない」」

二人揃って溜め息をついた。

お互いの境遇と仕入れた情報を話してみたが、これといった進展はなし。命の危機に直面するコトはないが、絶望的な状況に変わりはない。

「はぁ、不幸だ……」

「不幸だ言いたいのはこっちよ……道に迷うは、不良に絡まれるは……」

「不良って……オマエまた電撃かましたんじゃねぇだろうな……？」

「……そ、そんなことするワケないじゃない？」

「やったなやったんだなやったんですね三段活用！　しかもなんか疑問形で返されたし！　ココ学園都市じゃねぇんだぞ！？」

「うっさいわねぇ！その位わかってるわよ！　アンタが悪いのよ！」

「なぜに俺が！？」

「アンタに会ったときのコト思い出したのよ！！　“反抗期抜けてないガキ”呼ばわりして……」

「あ〜、え、え〜っと……」
内心で焦る当麻。記憶喪失である彼にとって過去のことを訊かれるのは、入国審査を受けるのと大差ない。
「ホー、アンタにとっては、そんなの記憶に残らないほど些細なことだった、というワケね」
当麻の様子から勝手に解釈した美琴。
とりあえず懸念事項から離れ、安心する当麻。
「いいわ。今度は忘れられないくらい強烈なのプレゼントしてあげる」
文字通り、バチバチと火花を散らし始める。
前言撤回。
さらに窮地に追い込まれた。
「いや待ってください美琴さんここは公園でありまして大勢の子供が遊んでいる訳で水たまりだってありますし万に一つそちら側に漏電しましたら――」
違和感に気付き、言葉が切れた。
水たまり？
昨晩、雨は降っていなかった。
ひなたにある以上、数日前のものとは考えにくい。
子供が水遊びに使った跡だと思ったが、その類いの遊びをしている

子はいない。
当麻が思案していると
突如、水たまりがムクリ、と『起き上がった』。
元の大きさからは想像出来ない液量で高さを増していく。
近くにいた人も異変に気付き出した。
大人たちは子供の手を引いて、その場を去ろうとする。
当麻は見逃さなかった。
誰にも手を引かれず、取り残された女の子がいるのを。
「クソッ！！」
地面を蹴り、少女のもとへ向かう。
その間も水は肥大化し、腕のようなものが生えてきた。
自身の腕を確認するかのように振るう。
その射程にはあの少女。
（間に合え……！！）
無我夢中で当麻は飛び込んだ。
「キャッ！？」
少女を抱き抱え、そのまま地面へ倒れ込む。
その背後を腕がかすめる。

「大丈夫か！？」
「う、うん……」

よかった。
少女を後ろに匿い、『水』と対峙する。
腕はひとまわり太くなり、目やら口やら顔を構成するパーツも見える。

「な、なんなのよコレ……」
追い付いた美琴が呟いた。
「御坂！　避難誘導たのむ！！」
「たのむって、アンタまさか……」

「俺はコイツをどうにかする」

反射的に美琴は言い返した。
「ムチャ言わないでよ！　こんな化け物に、アンタ何ができるっていうのよ！？」

超能力すら無効化できる当麻だが、基本的な運動能力はそこらの高校生と何ら変わりない。
それを知っている美琴は彼の隣に立つ。

「コイツは私が相手する。アンタはその娘連れて逃げなさい！」
「ダメだ。オマエは戦うな」
「！？　なんでよ！？」

相手の体が水で構成されているなら、自分の電撃で分解、弱体化させたところを叩く。それが彼女の作戦だった。

それでも、当麻には自分がやらなければならない、
いや、美琴を戦わせられない理由があった。

「周り見てみろ……」
「えっ？」

彼に言われて初めて気付いた。
腕を振り回した時にできたのか、地面には大小様々な水たまりができていた。
万が一、放った電気がこれを伝ってしまえば、まだ近くにいる人たちが感電してしまう。

「……わかった。ムチャすんじゃないわよ」
一抹の不安が残るものの、ここは彼にまかせるしかない。
少女の手を引いて、美琴はこの場を離れた。

「さて、と……」

彼女にはああ言ったが、どうしたものか。
相手の対処法はもちろん、出現した理由もわからない。
水流操作系の能力者ならばこういったことも可能だろうが、演算が複雑な上、効率が悪い。
思い至ったのはシェリー・クロムウェルが使っていたようなゴーレム、もしくはその亜種。
インデックスの話では、ゴーレムの機能を停止させるには体に刻まれた文字を削る、潰すなどすればいいらしい。
改めて、対峙している水を観察する。顔を形作るパーツは人のモノをはなれ、狼を模したモノへと変貌を遂げていた。

その額のあたりに、ひし型の黄色い宝石がある。
（アレか……！）
そこだけが違う材質。
刻印がない以上、あの宝石が核になっているのだろう。
それを壊せば、コイツは倒せる。
躊躇い無く、相手へと駆け出す。

が、水流弾が放たれ、それを避ける為に急ブレーキ。と、ぬかるみに足を取られ、背中から転ぶ。

弾は公園の木にぶつかり
細い幹が簡単に折れた。

「……マジ？」
冷や汗が出る。

水は１立方メートルで１トンの重量をもつようになる。灯油用のポリタンク２０リットルでも約２０キロの凶器と化す。
もし、それを相応の速度で飛ばせば２０キロ以上の衝撃を生むことができる。

次々と弾を放つ化け物と、必死に避ける当麻。
右手で消せるかもしれないが、もし異能の力から離れて惰性のみで飛んでいるのなら、その重量を片手にくらうことになる。賭をするには分が悪い。

どう攻めるか、考えていると、

攻撃が止んだ。

「！！」
すかさず、拳を握りしめ、泥を蹴り上げる。
あと3メートル。
踏み込み、飛び掛かる。
宝石まであと1メートルのところで
目の前を大量の水が覆った。
「！？　プァッ！！」
圧倒的な水量に、なす術無く押し戻された。
尻から落ち、鈍痛に呻くが、素早く立ち上がり体勢を整える。
化け物は新しい動きを見せていた。
居合のような構えをみせる。その腕を払った瞬間、
『壁』が横切った。
背後から金属が断末魔の悲鳴を上げた。
恐る恐る後ろを見る。
あったのは真っ二つに“斬れた”ジャングルジムだった。
（な、何なんだよ。さっきからのこの不幸は……）
顔が引きつる。
物体を切断する手段の一つに、ウォーターカッターがある。
高い圧力を加えた水を噴射する方法だ。
ダイヤモンドの切削加工等に用いられることからわかるように、そ

の切れ味は鋭く、薄い金属板であれば紙のように切り裂く。

（待てよ。高い“圧力”を加える……？）

思案する当麻をよそに、また構える化け物。

相手が動きをみせても、推考を重ねる。

（普通なら加圧装置やその水圧に耐える噴射装置が必要になる。けどアレはそれなしでやってる。つまり……）

脳内で結論がついたと同時に、居合が放たれた。

正確に当麻を狙って

※※※※※

「ほら。キミ、大丈夫？」

公園から少し離れた道路。

突然の『異常事態』に辺りは騒然としていた。

美琴は少女を安全な場所まで連れて行ったところだった。

問題は母親のもとまで送り届けた後。緊張の糸が切れたのか、泣き始めてしまったのだ。

当麻に次ぐお人好しの彼女。持ち前のお節介スキルを駆使し、どうにか宥めていた。

「うん、だいじょうぶ」

「そう、よかった」
落ち着きを取り戻した少女を見て安心して微笑む美琴。
「ねぇ、さっきのお兄ちゃんは？」
「へ？」
「さっき、あたしを助けてくれたお兄ちゃんは？」
「ああ、アイツのことね」
先程とは違う、力強い笑みを浮かべて断言した。
「大丈夫。アイツはね、誰かが苦しむ顔を見るのが嫌いなの。もしアイツが死んじゃったら、キミいやでしょ？」
「うん、泣いちゃう」
「そういう辛い思いをさせたくないから、アイツは絶対に倒れないわ」
「？　お姉ちゃん、なに言ってるのかわかんない」
「アハハ、ちょっと難しかったかな？　簡単に言うとね……」
「アイツはね、とっても強いヤツなの」
今も中で戦っているであろう公園を見ながら美琴は告げた。
その時、長い金髪が見えたのは気のせいか。
※※※※※
（ヤバかった……！　少しでも反応が遅かったら俺切れてた……！）

飛んできた水の刃を、当麻は右手を突き出して打ち消した。
余波でYシャツが所々切れたが、体が両断されるという最悪の結末は免れた。
もっとも、思考に集中し過ぎて、反応が遅れた時にはあせったが……。

それでも確信する。組み立てた推測の正しさ。
そして、自身の勝機。

当麻は化け物へと駆け出した。
相手も水の刃を連発するが、全て右手で打ち消す。
水流弾に切り替えるも、これも右手で無効化する。放物線を描かず、真っ直ぐにこちらへ飛んで来るならば、何らかの“力”が働いていることになる。つまり右手で触れた瞬間、前進するベクトルは消える。
幻想殺しが有効であることにより考える余裕が生まれ、作戦を組むことで冷静を保つことができる。
先程のようにガムシャラに突っ込むようなことはしない。
化け物を倒す算段はつけた。

あとは実行するだけだ。

化け物の弾幕は途切れることを知らないのか、次々と放たれる。
しかし、そんなものは彼の右手にとって取るに足らないものだ。
弾の隙間を縫い、避けられない弾は打ち消す。
互いの距離は縮み、5メートルに到達した瞬間、

弾幕が切れた。

一気に距離を詰める当麻。相手まで3メートルの位置から飛び掛かる

振りをした。

化け物は見事に引っ掛かってくれた。先程と同じように大量の水を放つ。

しかし、彼には当たらない。フェイントで小さく跳ねた後、着地した足でサイドへ移動、化け物の背後をとった。

その距離、1メートル。

大量の水を放った直後で化け物は動けない。

額の宝石を目掛けて右拳を放つ。

“宝石によって形作られた”後頭部を突き抜け、拳は宝石に当たり、

宝石は粉々に砕け散った。

※※※※※

かくして公園で起きたこの事件は終焉をむかえた。

騒ぐメディアや流布する噂の中に

“勇敢に立ち向かう少年”の話があったとか無かったとか。

第０６話　各人の行動（できること）［後編］（後書き）

週に一話書ける方ってすごいですね。

次回、「なのは」のストーリーに当麻たちが本格的に絡みます。

第０７話　始まりの交差（前書き）

予想以上に長くなりそうだったので、一旦切ります。

そうならないように選定しているつもりなのですが……執筆とは恐ろしいモノです。

第07話　始まりの交差

目を開けると、そこには見慣れぬ天井があった。

「……ん？」

いつの間に自分は寝たのだろう。

確か公園で御坂と会ったあと、水たまりから化け物が出て来て――

「っ！！　アイツは！？　みんなはどうなった！？」

勢いよく起き上がり

「ガァッ！？」

全身を激痛が駆け巡った。

仕方なく布団へ体を戻す。

「当麻、気がついた？」

呻き声を聞き付けたのか、フェイトが顔を覗かせた。

「フェイト、公園にいた人たちは？」

開口一番で彼女に訊ねる。それだけが気になって仕方ない。

「大丈夫だよ。ニュースでやってたけど怪我人はいないって」

「そっか、よかった……」

肩の力が抜け、頬が緩む。

「よくないよ……」

ポツリと、フェイトが呟く。

「え……？」

「当麻、私に言ったよね。一人で無茶するな、って……」

アルフがジュエルシードの気配を察知し現場へ急行。

そこにあったのは、肩で息をする当麻の姿だった。

急いで駆け寄ったフェイト達が肩に触れた瞬間、糸の切れたマリオネットのように、膝から崩れた。

マスコミや野次馬が来る前に退散、傷の手当てなど介抱して数時間。

その間、目を覚ます事なく眠り続けていたのだ。心配しない訳がない。

「不安だったんだよ。このまま起きないんじゃないかって……」

目に涙を浮かべながら思いを吐露するフェイト。

「ごめんな、フェイト。約束破っちまって……」

彼女の頭に手を乗せ、優しく撫でる。
「今度こそ約束する。絶対に無茶なことはしない」
「……ホントに？」
「ああ、上条サンを信じなさい」
「約束破った当麻を？」
「……え～っとですねぇ……できればその事は忘れて頂けるとありがたいのですが……」
痛い所を突かれ、しどろもどろになる当麻。
そんな彼を見て
「……フフッ」
いたずらっぽい笑みをフェイトは浮かべた。
「冗談だよ、当麻。次こそ守ってね」
呆気にとられる当麻だったが、
「ああ。守るよ、絶対にな」
決意を新たにする。
（にしても……）
話がここで一段落ついて、ふと思った。
「フェイトって、笑顔が似合うな」
「と、当麻……？」

突然の彼の告白に戸惑うフェイト。

「いや、その、可愛らしいというかなんというか……」

「か、かかかか、かわい……！？」

動揺するフェイト。顔はおろか耳や首筋まで真っ赤だ。

そんな彼女の変化に気付かず、意識せずに直球の言葉を打ち込む当麻。恐るべしフラグ体質、というべきか。

「ソソソソそうだ当麻、オオオお腹空いてない！？」

話を逸らそうと慌てながら訊ねる。

「そういや腹減ったな。なぁフェイト、俺どれだけ寝てたんだ？」

「えっと、公園からだから、大体１２時間くらいかな……？」

「道理で腹が減る訳だ……」

「待ってて、今作るから」

……ハイ？

「えっと、フェイトさん？」

「なに？　当麻」

「あなたが料理されるんでせうか？」

「うん、安心して。お粥ぐらいなら作れるから」

いや、大丈夫なんだろうが、やはり火を使うなら傍で見ていた方がいいのではないだろうか。

アルフに頼もうとしたが、

「あれ？　アルフはどこ行った？」

彼女の姿が見当たらない。

「アルフなら買い物に行ったよ。　薬とか晩ご飯買いに行くって言ってたから少し遅くなるかも」

「……さいですか」

彼女の親切心は嬉しいが、火傷しないか気にかけ続けるのも精神的につらい。

「フェイト、気持ちはありがたいが、ここはアルフが帰って来るまで待って皆揃って食べたほうがいいのではと上条は考えるのですが……」

それとなく話の方向を曲げてみようと試みる。

「無理してガマンしなくていいよ当麻。待ってて、今作るから」

見事失敗。

キッチンへ向かおうとするフェイト。

彼女を止める為に布団から立ち上がった。

その瞬間

「アガァッ！！」

再度、激痛が襲いかかる。
結果、全身から力が抜け、
前のめりになり、
「と、当麻！？」
彼の奇声で振り返ったフェイトを巻き込み、
為す術もなく、床に倒れ込んだ。
「ってて……わりぃフェイト、大丈夫か？」
ゆっくりと体を起こし、手を床につく。
フニッ
柔らかい触感が手に伝わる。
（フニッ？）
目線を己の下に向ける。
視界の先には仰向けに倒れたフェイトがいた。
その胸元には自分の手。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……えっ～と、フェイトさんこれはですね決してワザとではなく純然たる事故でありましてこの上条当麻めには悪意が全くなかったのでございましてしかしながらこの野蛮な振る舞いに対する罰は甘んじて受ける所存でして……」

沈黙に耐えかね、句読点抜きの懺悔を当麻は口にする。

早く退けろと思うかもしれないが、二人とも動揺で頭が処理落ちを起こし、当麻に至っては全身の激痛でマトモに動けない。

そこへ

「たっだいま～！」

タイミング良く（？）アルフが帰宅。

「「！？」」

二人に緊張が走った（同時に当麻の体に電流が走った）。

「イヤ～、効きそうな薬がなかなか見つからなくてねぇ、ちょいとばかし手こずっちゃったよ」

徐々に部屋（ここ）へと近づくアルフ。

そして

「とうま～、怪我の調子はどう――――

空気が凍った。

買い物袋が手をすり抜け、床に落ちる。

依然動かない二人。

いや、動けない。

目元に影が差し、黒いオーラを放つアルフを目の前に、運動神経が正常に働かない。

「当麻、あたし言ったよね。フェイトに変なコトしたら吹っ飛ばすって……」

「……はい」

「覚えてたみたいだね。つまり、そうされても文句は言わないって解釈するよ」

バキボキと指を鳴らすアルフ。

（ふ、不幸だぁーーーーーー！！）

※※※※※

「すいませーん、ここに……はい、そうですか。わかりました。ありがとうございます」

公園の騒動から一夜過ぎた。

朝のニュースで死傷者はゼロと報じられていたが、事件の度に入院するアイツのこと、同じようにドコかのベッドで寝ているのではないか。

そう思った美琴は桃子の手伝いの後、海鳴市中の病院をまわっていた。

しかし結果は空振りばかり。今回は無事だったのだろうか。

「御坂さん、人探しをされてるようですけど、もしかして昨日の方ですか？」

ユーノが尋ねる。

「うん。アイツよく厄介事に首突っ込んでは入院すんのよ。　妙な力持ってるんだけど、アイツは普通の無能力者だってのにいつもムチャしてさぁ……」

美琴本人は愚痴をこぼしているつもりだろうが、その表情はどこか嬉しそうな、誇らしげなものだった。

それを見たユーノはあることを察した。

「御坂さん、その人のコトが好きなんですね」

純真無垢、どストレートな彼の言葉が彼女を貫いた。

「な、ななななな何言ってるのよユーノ君！？　なんで私が

あ、あああアイツを、その、す、すすす好きってことになるのよ！　大体あんなスカした奴のどこがいいのよ！？」

「え？　でも昨日見た限りでは、そんなイヤな人とは思えないですけど……」

公園で彼の行動を思い返す。

ジュエルシードの暴走に対して怯まずに少女を救出。

動く大柄な相手だけでなく、周りの状況も把握して対処法を模索。

そして

公園にいた人々を守る為に、単身であの怪物に挑んだ。

イヤなやつとは程遠い、むしろ素晴らしい人だと感じた。

しかし、彼女は別のところで腹を立てていた。

「確かに、そういうところはアイツの長所だと思うわ」

けどね

「心配するコッチの身にもなれっていうのよァンのヴァカが～～～～～～！！」

「み、御坂さん！？」

突如叫び出す美琴。

日頃の鬱憤が余程溜まっていたのだろう。

「……フゥ」

残さず吐き出し、スッキリ顔の美琴。

冷静になって気付いた。

ここが街のド真ん中であることを。

道行く人々が何事かとコチラを凝視している。

「ア、アハハハハハハハ……お騒がせしましたーーーーーーーー！！」

常盤台寮の前から当麻を連れ去った時のように、美琴は何処へと駆けていった。

※※※※※

上条・御坂の失踪から二日。

風紀委員、警備員の両名が捜索するも、コレといった進展はない。

「学舎の園」と呼ばれる地帯の一角にある常盤台中学でも、ちょっとした騒ぎになっていた。

「御坂様、いったいどうされているのでしょうか……」

「“あの”御坂様が行方不明だなんて、未だに信じられませんわ……」

レベル5第三位にして常盤台のエース、御坂美琴の失踪は全生徒に衝撃を与えた。

それを受けての反応は様々。

先のように心配する者。

放課後、ボランティアという形で風紀委員の手伝いをする者。

彼女にとって替わって校内序列の上に立とうとする者。

彼女が常盤台の中心的存在であったことが伺える。

その一方

とある高校。

「はいはーい、授業始めるですよー」

教壇に立つ月詠小萌。

普段なら滞りなく始まる授業も

「先生」

吹寄制理の一声で止まった。

「どうしたんですかー、吹寄ちゃん？」

「上条当麻は今日“も”無断欠席ですか？」

「そーですよー。まだ足取りすら掴めてないのですよー」

上条当麻の失踪は昨日の内に伝えている。

「まぁまぁ吹寄。カミやんのことだし、大丈夫だぜぃ」
「そーやって。また病院経由で戻ってくるやろ」
「まったく、大覇星祭も近いというのに……」
「吹寄さん。諦めたほうがいいと思う。上条君だもの」
「上条のやつ、またか？」
「なんかアイツ、月イチで入院してないか？」
「お見舞い行ったほうがいいかな？」
「えっ！？　あんたも上条君狙ってたの！？」
「へ？　あ、あの、その……」
「いや、『あんた“も”』、って貴方も同じじゃない……」
「いや、べ、別に狙ってなんかないし、そりゃ不良から助けてくれたし、授業中もなんとなく眺めちゃうけど、なんとも思ってないからね！」
「……なんか腹立つセリフやね」
「これが。カミジョー属性？」
「そうだぜぃ姫神。こんな感じでカミやんは女子たちとフラグを立てているんだにゃー」
「戻ってきたら。矯正してあげないと」
「姫神はん、気持ちはよ～くわかるけど、そないな物騒なモン（スタンガン付き警棒）はしまってくれへんか？」

良くも悪くも慣れてしまったクラスメートだった。

※※※※※

「……なるほど、そういうことがあった訳だ」
「えぇ、ですのでわたくし上条当麻はフェイトに対してセクハラ行為をはたらくつもりは一切なかったのでございまして……」
「と、当麻。もういいから……」

渾身の土下座で謝罪する当麻。
そんな彼から状況説明を聞き、アルフは黒いオーラを収めた。

「もういいから顔上げなよ当麻。ほら、フェイトも困ってるだろ？」
「フェイト、本当にゴメン」
「だ、大丈夫だよ当麻。ワザとじゃないんでしょ？　次からは気をつけてね」
「はい、肝に銘じます」

ひと段落して、アルフが本題を切り出す。

「実はね、ちょっと遠出したついでにジュエルシードを探していたんだよ。そしたらね……」

地図を取り出し、“ある場所”を指差す。

「ここ辺りに気配があった」

そこは個人の敷地だった。

「……勝手に入ったら不法侵入にならないか？」
「そのあたりは心配ないよ。アルフが結界を張るから」
「結界？」
「うん。指定した空間を切り離す、って言ったらいいのかな。認識

されなくなるから、無関係な人を巻き込まないし、壊れた物も直せるんだ」
「もしかして、あの公園が何事もなかったかのように元通りだったのは……」
「うん、当麻と出会う直前に張ったの」
「だから、その辺の問題は解決済み、てワケ」
とりあえず当面の問題はクリアしているらしい。
改めて地図を見る。
「月村邸、ねぇ……」
誰とはなしに呟く当麻だった。

※※※※※

「お友達が？」
「はい、一度会ってみたい、って言ってるんです。それで明日、アリサちゃんと一緒にすずかちゃんの家に遊びに行くんですけど……」
彼女の話はこうだ。
定期的に開かれるお茶会でユーノの具合をみたいらしい。
元々彼は「ケガをして弱ったフェレット」として三人に発見された。
その後紆余曲折を経て、なのはのもとに預けられた。
レイジングハートを受け取り、ジュエルシードを集めて数日。
ケガも回復して元気になったことを伝えると、二人とも実際に見たいと言い出した。

海鳴市の地理に詳しくない美琴が探索する際、案内役としてユーノが付き添っていた。

明日は日曜日。一日中歩きまわる予定だと聞いていたなのは。
そのことを伝えると今度はその人に会いたいと来た。
どうにか諦めさせようとしたが、なのはの健闘虚しく決定してしまった。

と、いうことだった。

「なるほどねぇ……」

話を聞き、苦笑する美琴。
その話しぶりから必死に説得したのがわかるからだ。

「すいません美琴さん。予定をつぶしてしまって……」

ションボリと肩を落とすなのは。
友人を止められなかったことを相当悔やんでいるらしい。

「いいわよ、なのはちゃん。たまには息抜きも必要だろうしね、せっかくだから一緒に行かせてよ」

これは慰めるために言ったのではない。
先日、目的であった少年、上条当麻を発見している。
一応の無事も確認できたし、地理に不安ならば、この街から出ていくこともない。

ならば、焦る必要はほとんどない。

この世界に来てから、ずっと張りつめていたのだ。少しぐらいの休息はほしいところである。

「へ？　いいんですか？」

「うん。私もなのはちゃんの友達に興味あるしね」

美琴の言葉を聞き、パァっと明るくなるなのは。

急いでメールで連絡する彼女を見て、自身もまた楽しみに思う美琴であった。

※※※※※

そして翌日。

「アリサちゃん！　すずかちゃん！」

「なのはちゃ～ん！」

「遅いわよ、なのは！」

「にゃはは、ゴメンゴメン」

月村邸。

アリサ・バニングス、月村すずかの出迎えを受けるなのはと兄である高町恭也、そして美琴の三人。

「初めまして、私は御坂美琴。よろしくね」

「は、初めまして……」

「そ、その、よろしく、です……」

自己紹介する美琴に対して、年上の彼女に緊張する二人。
「にゃはは、二人ともリラックスリラックス。美琴さん、とっても気さくな人だよ」
なのはの言葉を受けてか、深呼吸をするアリサとすずか。
その間に恭也はすずかの姉、月村忍と別室に移動。
それと入れ違いに
ニャ〜
猫が数匹、コチラにやって来る。
「っ！！」
猫の視線に戦慄を覚えるユーノと
「っ！！」
心踊らせる美琴。
彼女、無類のカワイイもの好きであり、動物好きでもある。
こちらに駆け寄る猫たち。
しゃがみ込んで、両手を広げ笑顔で迎える美琴。
猫たちは

美琴の周囲を避けて、なのは達のもとへと駆け抜けていった。

「……」

笑顔でしゃがんだまま固まる美琴。

ＡＩＭ拡散力場。

Ａｎ－Ｉｎｖｏｕｎｔａｒｙ－Ｍｏｖｅｍｅｎｔ……「無自覚」を意味し、能力者が無意識の内に全方位へ放出してしまう微弱な力の事を指す。

電撃使いである美琴の場合、それが電磁波として表れる。

精密機器を使わなければ測定できない程の弱さだが、鋭敏な感覚を持つ動物はこれを敏感に察知。

結果、好きな動物に避けられるという悲しいお話ができ上がる。

ちなみにこの話、美琴のクローンである妹達（シスターズ）にも適用される。

「ハハ、ハハハ、アハハハハハハハハ……」

心中で大号泣の美琴だった。

※※※※※

同時刻。

「ここが目的地だね」

「……でけぇな……」

「地図で広いことは予想してたけど、すごいね……」

月村邸の前まで来た当麻、フェイト、アルフ。

ヘタに魔力を感知されると暴走する可能性がある、とのことでギリギリまで近づいて強襲して封印する、というのが今回の作戦だ。

「それでアルフ。どこから入るんだ？」

屋敷を眺めながら当麻が問いかける。まさか小細工なしでこの門から入るのではないだろうか。

「ここから少し行くと柵が無くなるんだよ。そこから行けば退却するときも何かと便利だろぅ？」

「普通、セキュリティってのはそういう場所に集中してるモンだぞ」

「突入の瞬間だけ結界を張ってその後は隠密行動。それが今回の作戦だよ」

「まぁ、何も出来ない上条さんに口出しする権利はございませんけどね……」

柵に沿って歩き出す三人。

１０メートル程進んだところで

二人の足が止まった。

「……？　どうした、二人とも？」

不審に思い、振り返る当麻。

「……フェイト」

「うん、ジュエルシードだ」

「！！」

緊張が走る。

「どこだ！？」

「この敷地の中！　やっぱりここにあったんだ！」

焦った声で答えるアルフ。

発動してしまうのは彼女でも想定外だったらしい。

（くそ！　どうする……！？）

むやみに突っ込めば警報装置が作動する。

結界を張ればクリア出来るだろうが、目標がこちらへ来るとは限らない。

最悪、結界の魔力で暴走するかもしれない。

どうしようか悩む当麻。

彼の背後から金色の閃光が走った。

振り返ると丈の短いワンピース姿だったフェイトの格好が一変。
公園で出会ったときの、黒いマントを羽織った格好をしていた。

「アルフ！　ここから結界張れる！？」
「できなくはないけど、どうするつもりだいフェイト！？」
「ここから、ジュエルシードを狙う！」

そう言うと、近くに立つ電柱の頂上へ軽やかに飛び乗る。

彼女が愛機の戦斧『バルディッシュ』を変形させ、アルフは魔方陣を展開させる。

そして、ある事に気付いた。

「結界が、張られてる……？」

※※※※※

当麻たちが月村邸に着く少し前。

なのは、アリサにすずか、そして打ち解けた美琴は紅茶を片手に談話していた。

そんななか、なのはが驚いたような表情を浮かべた。同時にユーノがピクリと顔を上げる。

「（ユーノ君、これって……！？）」

「（うん、ジュエルシードの反応があった！）」

念話で伝えると、美琴の肩（猫が来ない安全地帯と判断）から飛び下り、茂みの中へと入っていった。

「あ、ユーノ君！」

彼を追いかけようと立ち上がるなのは。

「ゴメン二人とも！私達で捕まえるから、ちょっと待ってて！！」

そう言い残し、彼女の後を追う美琴。

残された二人が呆気にとられているうちに、二人は茂みの奥へと消えていった。

※※※※※

「ドコにあるか、わかる？　ユーノ君」

「こっち！　強い反応があったんだ！」

ユーノを先頭に茂みの中を進む。なのはは白を基調としたバリアジャケット姿になっている。

「っ！！　止まって！！」

突然、制止をかける美琴。
ＡＩＭ拡散力場により、常に電磁波を放つ彼女。動物に避けられるという欠点を持つが、同時に利点もある。
電磁波の反射により、たとえ目に見えずとも、物体の位置を把握できるのだ。レーダーの役目を果たすと言っていい。

その“レーダー”　が何かを感知したのだ。
警戒しながら進んでいくと

「……」
「……なに、コレ？」

絶句するなのはと美琴。

二人の視線の先にいたモノ。
それは

巨大化した子猫だった。

「え～っと、たぶん、この子の『大きくなりたい』っていう願いを叶えたんだと思う……」
「なによそのギャグ漫画みたいなオチ！？　ってかどれだけ大雑把なのよジュエルシードって！？」

ユーノの推測に美琴がつっこむ。
ジュエルシードについては事前にユーノから聞いている。
魔法のランプのように持ち主の願いを叶えるアイテム、らしい。
ただ、“コレ”を見る限り、マトモなものとは思えないが。

「と、とにかくなのは！僕が結界を張るから早くジュエルシードの封印を！」
「う、うん！」
なのはがレイジングハートを構える

と、同時

金色の閃光が、子猫を捉えた。

「っ！？」
「！！」
「なっ！？」

重々しい音をたてて、子猫が倒れる。

しかし、三人に気にする余裕はない。

閃光の飛来元に目を向ける。

そこには

黒い杖を携えた、長い金髪の少女が佇んでいた。

第０７話　始まりの交差（後書き）

話のテンポが乱れないうちに次話を書き上げる予定です。

本業の方が忙しくなりますが、最低でも月に一話は上げるつもりでいます。

第０８話　ファーストコンタクト（前書き）

本業の忙しさに加えて震災の影響を受け、会社自体が混乱しておりましたが、最近になってどうにか落ち着きました。

被災地の方に私達が出来ること。

それは『過敏に反応し過ぎないこと』だと思います。

それでは約４ヵ月ぶりの更新となる第８話、お楽しみ頂けると幸いです。

第０８話　ファーストコンタクト

みなが動揺するなか、ユーノは目にした現象が意味するものを察した。

（今の魔法光、間違いない。彼女は、僕と同じ世界の魔導師だ……！）

依然、金色の閃光は猫に向かって飛来する。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

防御魔法を使い、猫を庇うなのは。

「っ！！　くらえっ！！」

その間に美琴は電撃を放つ。

しかし、当たる直前に少女は飛び上がった。

同時に閃光のひとつが地面に着弾、大量の土煙を上げる。

「きゃっ！？」

「うっ！？」

反射的に腕で顔を覆う。

ギシリ、と近くの木の枝がしなる。

顔を上げて見てみれば、先程の少女がそこにいた。
「同型の魔導師……ロストロギアの探索者か……」
なのはを見下ろしながら、呟く少女。
「！！　間違いない。この娘、ジュエルシードの正体を……！」
「ロストロギア、ジュエルシード……」
手に持った杖、『バルディッシュ』を鎌状に変形させる。
「申し訳ないけど、いただいていきます」
一気に踏み込み、斬りかかる。
淡い桃色の羽を広げて飛翔、魔力の刃をかわすなのは。
バルディッシュを構え直す少女。
それを振り切ろうとした瞬間
彼女は違和感を感じた。
急いで手元を見ると、
愛機の杖が地面から出る黒い粉に捕らわれていた。
（な、なに！？　これは……砂鉄！？）

力いっぱい引っ張っても動かない。
「アンタさぁ……」
「！！」
声のした方に顔を向ける。
御坂美琴がそこに立っていた。
右手を帯電させながら。
「ドコの誰なのか、ジュエルシード集めて何しようと思ってるのか、訊く気はないわ。
でもね……」
手の中の電気が大きく膨らむ。
「私の友達に、手ぇ出してんじゃないわよ！！」
振りかぶり、電撃を飛ばす。
「クッ！」
魔方陣を展開。
その直後、目の前が青白い光で覆われた。
「なのはちゃん！　今のうちにその子を！」
「は、はい！！」

美琴が放った電撃の凄まじさに見とれていたなのはだったが、自分の仕事を思い出し、猫のもとへ向かう。

どうにか電撃を防ぎ切り、砂鉄を振りほどいた少女も向かおうとする。

が

「行かせると思う！？」

言うと同時、２発目を放つ。

彼女も先程と同様に防ごうとするも

（ダメ、間に合わない……！！）

展開し切る前に、相手の攻撃がこちらに届く。

迫る雷光。

かたく瞼（まぶた）を閉じる。

ガラスが砕けたような、バキン、という音が響く。

「なんとか間に合ったみたいだな……」
「……？」
恐る恐る目を開ける。
そこにあったのは
「大丈夫か、フェイト？」
包帯だらけの右手を前に突き出したツンツン頭の少年。
上条当麻の後ろ姿だった。

※※※※※

「御坂の相手は俺がする。フェイト、お前はジュエルシードを回収しろ」
「で、でも当麻、あの人強いよ……平気なの？」
先程の一撃でわかる。
速い上に強烈過ぎる攻撃。

しかも、それは本気ではない。
もし、当麻が割り込んでこなければ、自分は倒れていただろう。
そんなフェイトの心配を
「安心しろフェイト」
“笑顔で”吹き飛ばす。
「前みたいな無茶はしないから、さ……」
「へぇ……」
当麻の言葉を聞き、帯電する美琴。
「大層な自信じゃない……ちょうどいいわ。ここでケリつけようじゃない！！」
美琴が電撃を放つも、当麻の右手はそれを打ち消す。
「行け、フェイト！！」
「う、うん」
力強く踏み込んで跳躍。
フェイトはこちらを一度振り返ったが、すぐに猫のいるほうへと飛んでいった。
呆れたように美琴はため息をつく。
「アンタのことだから、なんかワケが有るんだろうけどさ……コッ

チも引く訳にはいかないのよ！！」

地面に向けて電流を放つ。
すると、黒い粉が美琴の手へと引き寄せられていった。
手の中の黒い粉――砂鉄は細長い形状へと変化していく。

木刀のような形状に。

「チョ、得物使うのは卑怯なんじゃない！？」
「能力で作ったモノだもん。アリに決まってんでしょ？」

木の葉が舞い落ちて、砂鉄の剣に触れた

瞬間、真っ二つに切れた。

「っ！！」
「砂鉄がチェーンソーみたいに振動してるから、触れたらちょーっと血が出るかもねぇ！」

いいながら急接近。

「どぉ考えても、それだけじゃ済まないと思うんですけどぉ！？」

横薙ぎをしゃがんで避ける。
背後にあった樹に剣が刺さった。
そのまま、剣を振りきる美琴。

ブゥーン、という残響が消えたと同時、バキバキと音をたてながら

その樹が倒れた。

「さぁて、いつかのリベンジとさせてもらうわよぉ」

嬉々とした声で武器を振り回す美琴。

彼女にスイッチが入ったらしい。

「『不幸だ』、なんて言ってられねぇよな……」

深呼吸を一つ。

「いいぜ、本気で相手になってやるよ……！」

※※※※※

「えっと、どうすればいいのかな……？」

無事、猫のもとまで辿り着いたなのはだったが、封印の手順で迷っていた。

攻撃する訳にはいかないし、拘束するのも気が引ける。

「早くしないとアノ子が来ちゃう……」

直後

《ｗａｒｎｉｎｇ！》

「っ！！」

迫る金色の刃。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

防御魔法を展開、辛くも防ぎ切る。

高度を上げ、様子を伺おうとした瞬間、

鎌のように刃を展開した杖を振り降ろす少女の姿が目の前にあった。

「ウッ！！」

レイジングハートを横に構え、彼女の杖を受ける。

「なんで……なんで急にこんな……」

間近に捉えた少女に問いかけるなのは。

それに対する彼女の返答は冷やかなものだった。

「答えても、多分……意味がない」

互いに距離を取り、杖を構え直す。

《Ｄｅｖｉｃｅ　ｆｏｒｍ》

《Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｆｏｒｍ》

互いの杖を変形させ、相手へ向けあった。

「……」

「……」

砲撃の準備も完了し、一触即発の雰囲気が辺りを支配する。
その空気を破ったのは

「ニャ～～」

巨大猫だった。
思わず、そちらに意識を向けるなのは。

それが命取りだった。

少女は杖の先に魔力弾を作り

「　　」
《ｆｉｒｅ》

それを放った。

「っ！？」

気付いた時には遅かった。
視界いっぱいが金色に染まり、爆発の後
彼女の体は宙を舞った。

※※※※※

「なのは！！」

ユーノは彼女のもとへ急いだ。
重力に倣い、自由落下するなのはの体。

「ユーノくん！！」

途中で美琴と合流する。

「なんか爆発したみたいだけど、何があったの！？」
「なのはが、やられました……」
「！！　なのはちゃんは大丈夫なの！？」
「幸い軽傷で済んだようですが……気を失ったらしくて……」

二人でなのはを見上げる。目を覚ます気配もなく、真っ逆さまに落ちている。
今のままでは大怪我は必至だ。

「急ぎましょう！！」
「そうね！！」

※※※※※

猫のそばに降り立ったフェイト。
封印作業に取り掛かる直前

「フェイト、無事か！？」
背後から聞き慣れた声がした。振り向くと
体中に擦り傷や切傷、打撲傷をこしらえた当麻が立っていた。
「って、当麻のほうこそ大丈夫！？　私以上に傷だらけだよ！？」
「平気だよ。こんなの日常茶飯事だからな。それより……」
巨大猫を見る。
「あとはジュエルシードを封印すればいいんだよな？　どうやって取り出すんだ？」
「外から刺激を加えればジュエルシードは出てくるの。それを封印すれば……」
「刺激って、殴ったり叩いたり、とかか？」
「……この子には、可哀想だけどね……」
言葉が尻すぼみになっていく。隠しているつもりだろうが、あまり乗り気ではないことが窺える。
「なぁフェイト。この猫はジュエルシードの力でデカくなったんだよな？」
「？　うん、そうだけど……」
「で、ジュエルシードを取れば元の大きさに戻る、と？」
「う、うん」
答えつつ、首を傾げるフェイト。
一つ一つ確認する彼の真意が分からない。

「そっか。なら……！」

なにかを確信したらしい。当麻は右手でゆっくりと猫に触れた。

すると異能を打ち消す音が響き、猫の体躯が縮小していく。体を大きくしていた魔力を打ち消したのだ。

少し経つと、ジュエルシードが淡い光を放ちながら浮かび上がってきた。

「フェイト、封印してくれ！」

「え？　あ、うん！　バルディッシュ！」

《Ｙｅｓ　ｓｉｒ》

フェイトの呼びかけに反応し、バルディッシュはシーリングモードに変形。魔力の羽を展開する。

「『ロストロギア』ジュエルシード。シリアルナンバーＸ？、封印！」

瞬間、視界が一色に染まる。

周りの色が戻った時、二人の目の前には、静かになったジュエルシードが浮かんでいた。

《Ｃａｐｔｕｒｅｄ》

かざしたバルディッシュにジュエルシードが吸い込まれる。

「封印、完了……」

その言葉と同時にバルディッシュから大量の蒸気が噴出された。

「ハァ……これで終わったのか？」
「うん、あとは退却するだけ、なんだけど……」
フェイトの目線を追う。
すると二つの姿に辿り着いた。一つは御坂美琴のもの。
そしてもう一つは……
「御坂！　その子、大丈夫なのか！？」
「あっ！　当麻！」
倒れたまま、動く気配がない。
気付いたときには、体は彼女たちの元へと向かっていた。
「大丈夫よ。気絶してるだけだから、命に別状ないわ」
「そっか、よかった……」
それを聞いて、胸を撫で下ろす。フェイトはこの子と戦っていたのだろう。
改めて、その姿を見る。
歳はフェイトと同じくらいか。栗色の髪を二つに結い、白いバリアジャケットを纏っていた。手には赤い宝玉に金色の装飾をあしらった杖が握られている。
「この前、オマエが言ってた『世話になってる家の娘さん』って……」
「高町なのはっていうの。友達の手伝いとしてジュエルシードを集めてる、って言ってたわ」
「友達のため、か……」
「で、アンタはあの子の所で厄介になってる、と……」

当麻の背後、数メートル先にいるフェイトを睨みながら美琴が言う。
「あぁ。アイツの方も訳アリらしくてな、危なっかしいから手伝ってるんだよ」
ハァー、と溜め息を吐く美琴。
「なのはちゃん傷付けたヤツに一発くれてやろうかと思ったけど……」
鋭かった目つきが元に戻る。
「たいした怪我もないし、そっちにも理由があったんなら、深くは追及しないわ」
「そっか、そうしてくれると助かる」
「けど今回だけよ。次はないと思うことね」
「あぁ、わかったよ……」

※※※※※
それから数時間が経ち、夜を迎えた。
「あ～、疲れた～……」
ソファに寝そべりながら、当麻は呻いた。
「ハハ、ハイ当麻、ご苦労さま」

「お、サンキュー」

アルフからココアを受け取る。基本的にフェイトとアルフしかいない為、この家にコーヒーは置いていない。

「なぁアルフ」
「なんだい、当麻？」
「なんでフェイトはジュエルシードを集めてるんだ？」
「？　どうしたんだい藪から棒に？」
「いや、ちょっと気になってさ……今日会ったなのはって子は友達を助ける為っていうし、フェイトにもそういう理由があるのかなぁ、と……」

思い返してみると、彼女から集めるようになった経緯を聞いていない。いい機会だと思い、尋ねてみたのだ。

「う～ん、母親の為、かなぁ……？」
「母親の？」
「ま、詳しい事は本人に直接訊きなよ」

今現在、フェイトは入浴していて、ここにいない。

「なら、後で訊いてみるか……」
「そうしてくれるとありがたいよ。フェイト、この世界に来てからは独りぼっちだったから、話し相手がいなくてね……」
「まぁ、俺でいいんなら……」
「当麻だから頼んでんのさ。大分アンタに懐いてるようだしね」

こちらを向いてニカッ、と笑うアルフ。
少し照れ臭くなり、思わず立ち上がる。

「当麻？」
「あ、ちょっとトイレ。ってかトイレってどこだっけ？」
この家の間取りが把握できていない当麻。風呂上がりのフェイトと鉢合わせしないように確認をとる。
「トイレならそこだよ」
ドアを指差しながら教えるアルフ。立ち上がり、何やらゴソゴソと冷蔵庫を漁り始めた。
何やってんだと心中でツッコミながら、教えてもらったドアを開けると、
畳んだバスタオルと洋服がはいったカゴがそこにはあった。
（あ、あれ？　もしかして俺、やっちゃった？）
今、扉を閉めれば何もなかったことになる。
が
ガチャッ
世の中は無情である。
「フゥ……えっ？」

声のした方を見れば、腰まである金髪を湿らせた、一糸纏わぬ姿のフェイト。

「……」

「……」

昨夜に続き、両者とも処理落ちを起こす。

そして、

「……イ」

フェイトは着替えの入ったカゴをひっ掴み、

「イヤーーーーーーー！！」

全力投“籠”。

当麻の顔面にクリーンヒット。後ろ向きに倒れていき、後頭部を壁に打ち付けた。

「ふ、不幸だ……」

薄れゆく意識のなか、

「ゴ、ゴメン当麻！　大丈夫！？」

「間違えた！　当麻、そっちはお風呂、って遅かったか……」

「アルフ、当麻運ぶの手伝って！」

「その前に服着なよフェイト！」

「へ？　あ、はぅ……」

そんな音声が聞こえたのは夢か幻か。

※※※※※

消灯し、月明かりのそそぐ室内。
布団に潜ったなのはは、あの少女を考えていた。

（あの子、いったい何者なんだろう……）

歳は自分とそう変わらない。綺麗な髪、綺麗な顔立ち。
なのに、その目は

（寂しそうだった……）

あの目が脳裏に焼き付いて離れない。
そして、なによりも心を締め付けるのは、自分に向けられた言葉。
止めを刺す直前に彼女は言った。

苦しそうに。

つらそうに。

「ごめんね」、と。

第０８話　ファーストコンタクト（後書き）

次こそ１ヵ月で書き上げるぞ！

次回は温泉でのお話しになります。

第０９話　海鳴温泉（前書き）

お待たせさせてすいません。
遅筆な自分に自己嫌悪です。

第09話　海鳴温泉

学園都市には窓のないビルがある。
ドアも窓も廊下も階段もない、建物として機能しないビル。空間移動（テレポート）を使わない限り、出入りもできない密室。
その中心に鎮座するのは巨大なガラスの円筒。中には赤い液体が満たされている。室内は機械類で埋め尽くされ、そこからはコードやチューブが伸び、円筒に接続されていた。
その赤い液体の満たされた円筒の中には、緑色の手術衣を着た人間が逆さで浮かんでいる。

学園都市統括理事長、アレイスター＝クロウリー。

男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見えるこの『人間』の目の前には、一人の男が立っていた。

「さて……」

ツンツンの金髪に青いサングラス、アロハシャツにハーフパンツと、薄暗いこの場所にはまるで合わない格好の男。

「上条当麻に何が起きたのか、お前は知っているんだろう？　何があった！？」

土御門元春。上条当麻の親友だ。
そして、イギリス清教に所属する魔術師にして、その情報をリークするスパイとしての顔も持つ。
その立場上、科学と魔術の双方で起きていることに精通している彼

は上条当麻の失踪に疑問を抱いていた。
今現在、科学サイドで目立った動きはない。
ローマ正教で怪しい動きがあるが、魔術サイドも事件は起きていない。
つまり、上条当麻が事件に巻き込まれた、というはないに等しい。
自分も把握していない計画が進行している可能性を思い、学園都市のすべてに精通しているアレイスターを問い詰めることにしたのだ。
ただ、その返答は
「いい所に来た。想定以上のイレギュラーが発生したのでな」
アレイスターの口から出た言葉としては、意外なものだった。
「想定以上の、イレギュラーだと……？」
土御門は眉をひそめた。
アレイスターは現在、とある『プラン』を実行している。
能力者の量産を目的とした『量産能力者計画（レディオノイズ）』も、
学園都市最強の超能力者を被験者とする『絶対能力進化（レベルシフト）計画』も、
その『プラン』の一角でしかない。
そこにイレギュラーが発生する度、アレイスターは調整を加え、手順を省いてきた。

つまり、イレギュラーが発生すればする程、アレイスターには都合のいい状態と言えるのだ。
そんな絶好の機会を利用しないというのは不自然以外の何物でもない。

「まさか、お前に限って行方がわからない、なんて事はないだろ」
「簡潔に言おう。彼はこの世界にいない」
「っ！？」
「しかし、死んだ訳ではない」
「……どういう事だ？」
「君は“並行世界”の存在を信じるかな」

並行世界、パラレルワールド。
非科学的な単語に聞こえるかもしれないが、相対性理論を元にした観点から見れば、『実在する』と断言してしてもよい。
元から別々だった世界。
選択肢により分岐した世界。
その誕生、在り方は様々だが、相互不干渉が原則だ。

「まさか、上条当麻は異世界に迷い込んだ、とでも言いたいのか！？」
「ああ、その通りさ」
「なにっ！？」

一番あり得ない可能性を肯定された。
それだけでなく、彼自身の現状まで把握している。

「そこまでわかっていながら、なぜ対処しない！？」
「こちらが把握しているのは別の世界へ行った、ということだけ。

行方はまだ特定できていない」

並行世界の数をご存知だろうか。
１００か？　１，０００か？　それとも１０，０００？
諸説あるがその数、
およそ１２０，０００。
その中から該当する一つを捜し当てられる確率は１パーセントにも満たない。
はっきり言ってしまえば状況は絶望的、打つ手なしだ。
しかし
“まだ”ということは、目星はついているんだな？」
手段が潰えた訳ではない。
恐らく、もう少しで上条当麻の居場所も特定できる。
そこから連れて帰る方法も考えている。
不可能と思われるそれらを目の前にいるアレイスターは平気でやってのけるのだ。
「なに、そう時間は掛からないさ。それまで準備していればいい」
「準備……？」
「向かった先が安全な世界とは限らないだろう？」
「……わかった。特定したらすぐに報せろ。いいな？」

アレイスターに背を向ける。近くに待機していたテレポーターに声を掛け、土御門はこの場を去った。

※※※※※

もうひとりの魔法少女との遭遇から数日後。
高町一家にアリサとすずか、美琴は海鳴温泉にいた。
ちょうど休みが重なり、連休となった為、美琴の歓迎会を兼ねた慰安旅行をすることとなったのだ。因みに、翠屋は店員に任せている。

「なんかすいません、私まで連れて来てもらって……」
「ハハハ、畏まる必要はないよ。キミもうちの家族の一員だからね」
戸惑う美琴に笑顔で返すのは、なのはの父、高町士郎。喫茶『翠屋』のマスターでもある。

「そうですよ美琴さん。遠慮しないでください」
なのはの言葉にウンウンと頷くアリサとすずか。この数日間でかなり打ち解け、『頼りになるお姉さん』として慕われるようになった。

「あ、ありがとう、ございます……」
はにかみながらもお礼を返す。ここまで言われると、少々気恥ずかしい。

「これでよし、と。みんな、先に温泉へ行ってきなよ」
「「「ハーイ」」」

ここで荷物の整理を終えた士郎から提案が上がる。

「あの、いいんですか？」
「あぁ、少ししたら僕らも行くよ」
「でしたら、お言葉に甘えて……」
「美琴さーん！　早く行きましょー？」
「待っててー。今行くからー」

着替えと洗面用具を持って、なのは達のもとへと向かう。

「ここの温泉、とても広いんですよ」
「へぇ、それは楽しみね」
「背中の流しっこ、しましょうね」
「温泉ならでは、て感じよね」

談笑しながら温泉へ向かう４人。
そして、銭湯の入り口前まで来たところで

美琴が立ち止まった。

「美琴さん？」
「どうしたんですか？」

なのは、すずかの声に応じず、ある一点を凝視する美琴。

「何かあったのかしら？」

美琴の目線をアリサは辿る。
人影はほとんど無く、男湯に入ろうとする男性が一人いるだけ。他

に目を引くような物はない。
視線を戻すと、
「な、な、ななな……」
美琴が頬を赤く染め、何やら呻き始めた。
「あの人、御坂さんの知り合いですか？」
「し、知り合いもなにも……」
男性を指差し、
「なんでアンタがここに居るのよーーーーーーー！？」
言い放った。
彼女の指し示す先、そこには
「げっ、ビリビリ！？」
男湯の暖簾をくぐろうとしたところで動きを止めた上条当麻の姿があった。

※※※※※

「海鳴温泉？」
「うん。次のジュエルシードはそこにあるの」

当麻手製の朝食を摂りながら、予定を話すフェイト。
彼の作る料理が気に入ったようで、最近ではリクエストもしてくる。
当麻としても、自分が作った料理を笑顔で食べるフェイトに対して嬉しく思っていた。居候の暴食シスターにもこの感謝の念は見習ってほしい、と思ったのは余談である。

「最近、いろんなことがあって当麻も疲れてるでしょ？　どうせなら温泉に浸かってくればいいかと思ったんだけど……」
「一緒に来なよ当麻。傷の治りも早くなるかもしれないしさ」
「そうだなぁ……」

二人の言葉を受けて上条は考えた。
確かにこの世界に来てからは、立て続けに事件が発生し、その解決に奮闘してきた。
その他、大小さまざまな不幸（トラブル）にも巻き込まれている。
元の世界に戻る手段も見つからないままだ。

状況が動かない。
ならば、ここはいっその事休みを入れて、心機一転を図るのもひとつの手かもしれない。

「ん～……なら、俺もついてこうかな……」
「そうしなよ。フェイトも寂しがるしね」
「ア、アルフ！！」

顔を真っ赤にしてパートナーを諌めるフェイト。
今のアルフの発言。これは先日起きた出来事に起因する。

・　・　・

その日も当麻は市内を歩き回り、情報収集に励んでいた。
しかし、『不幸』を具現化したような彼が無事で済むはずがない。
図書館までの道中で猫同士のケンカに巻き込まれ。
館内で車椅子に乗った少女の為に一番上の本を取った際、その段の本すべてが頭上になだれ落ち。
帰り道では不良に絡まれた女学生を助けようとして逆に彼らに狙われ鬼ごっこ。
彼らを撒いた頃には、すっかりと日が暮れていた。
ボロボロの状態でどうにか帰宅、その姿を見たフェイトから半ば強引に手当てを受けていた。

「もう……当麻って出掛ければ必ずケガするよね」
「いや、上条さんもしたくてしてるワケではないんですよ？」
「やっぱり私がついていった方がいいかな……」
「あの～、フェイトさん？　ワタクシの声は聞こえておりますでしょうか？」
「……決めた。当麻、明日は一緒に出掛けよう」
「いや、いいって。俺だって子供じゃないんだからさ。フェイトはフェイトでやりたいことをやれよ」
「そういうけど当麻、傷薬の減りが最近早くなってるよ？」
「うっ……」
「これって当麻が毎日ケガして帰ってくるからだよね？」
「スイマセンそれ以上言わないでください……」

小学生に言い負かされる高校一年生がここにいた。

「これじゃ、ドッチが年上か分からないねぇ」
「いや、これ以上追い撃ち掛けないでくれアルフ」

ガックリ項垂れる当麻を見て、アルフは顔に表した笑みの度合いを

増やした。
今の応酬がヤンチャ坊主とその母親のモノとほとんど変わらないからだ。
イザというときには頼りになるのに、普段は事無かれ主義で流されやすい性格。
アルフから見て、そんな上条当麻は“おもしろい”人物だった。

「はい当麻、次は右腕出して」
「あぁ、いつもワリぃなフェイト」
「気にしないでよ。当麻は私が危ない時に、いつも助けてくれるんだもん。これ位はさせてほしいな」
「それこそ気にすんなよ。俺は俺のやりたい事をやってるだけなんだからさ」

はにかみながら答える当麻。
事実、彼は助けたいと思ったからそう行動しているだけであり、そこに恩や借りといった考えはない。
だから、こう面と向かって言われると少々照れ臭い。

と、ここで

ダゴンッ！　と窓いっぱいを閃光が埋め尽くし、轟音が部屋を駆け巡った。

「キャッ！！」

小さく悲鳴を上げるフェイト。
一瞬、部屋が暗くなったが、すぐに回復。停電には至らなかった。

「結構近くで落ちたな……」

「高層ビルだし、時々あるんだよねぇ……」
「……」
「え～っと、フェイト、さん？」
恐る恐る、フェイトを覗き込む。
落雷の瞬間、小さく悲鳴を上げた彼女は
咄嗟に当麻の体に抱きついていた。
「……」
「危機は、去りました、よ？」
目を堅く瞑り、顔を当麻の胸元にうずくめたまま、動こうとしない。
強引に引き剥がすのも気が引けるしなぁ、なんて考えていると
「ンッ……」
ゆっくりと顔を上げ始めた。
まず、周囲の安全を確認。
次に、超至近距離に当麻の顔を確認。
そして、現状を改めて脳内処理。
「ゴ、ゴゴ、ゴメン当麻！　これワザとじゃないからね！？」
出力結果＝赤面＆動揺。
「いや、それはわかるから！　いいから落ち着けフェイト！」
フェイトの肩に手を置き、割と必死に呼びかける。

「ほらフェイト、深呼吸だ！」
「スーハースーハー……」
どうにか無事に回復したフェイト。しかし……
「はうぅ……」
赤面は継続していた。
そんな彼女を見た当麻は
「……プッ」
思わず吹き出してしまった。
「もう！　笑わないでよ当麻！！　うぅ、恥ずかしい……」
「悪ぃ悪ぃ。いや、フェイトもそういうところがあるんだな、って思ってさ」
「そういうところ？」
首を傾げるフェイト。
「フェイトってさ、いつも毅然としてるっていうか、強がってるっていうか……なんかこう、弱みを見せようとしないところがあるからさ……今みたいな『普通の反応』が見れて嬉しいんだよ」
彼女の頭を撫でながら、優しく語り掛ける当麻。
「前にも言ったろ？　お前はまだ子供なんだから、弱音吐いたっていいんだよ。甘えたいときには甘えて、泣きたいときには泣いてもいいんだぞ？」

「う、うん……」

頬を赤く染め、蚊の鳴くような声で答えるフェイト。そんな彼女を見て、アルフは笑みを浮かべた。
自分の主人が、人に対してここまで気を許した姿を見せるのは随分と久しい事だ。

「ねぇ、当麻」
「ん？」
「甘えたいんなら、甘えてもいいんだよね……？」
「あ、あぁ……」
「なら、今日、一緒に、寝ても、いいかな……？」
「え？　は、はいぃ！？」

フェイトによる突然の提案。
さすがの当麻も動揺する。

（イヤ、甘えてもいいとは言ったけど飛躍し過ぎてませんかフェイトさん！？　ってか、女の子なのにガード甘すぎですよ！？）
「ダメかな、当麻……？」

涙目＋上目遣いのコンボ。
この状況で上条当麻が出せる答えは一つしかなかった。

※※※※※

「ファ～……」

旅館の廊下を歩きながら、噛み殺すことなく当麻は欠伸した。
結局、その後は一緒に寝ることになった。
しかも同じ部屋、ではなく一つの布団で。
重ねて言えば、その日から今日まで毎日。
緊張と気恥ずかしさで眠気など吹っ飛んでしまい、最近は寝不足気味の当麻。
フェイトが寝入ったのを確認して布団から出ようとすると、彼女は悲しそうな表情を浮かべながら彼の服を掴んで放さなくなる。
それを見てしまうといたたまれなくなり、元の位置に納まる。
毎晩、その繰り返しだ。
そして彼女の顔に安堵の色が戻る度、いつも考えてしまう。
フェイトの母親とは、いったいどのような人物なのだろうか。
ジュエルシードの収集という危険な事を娘にさせ、その様子を見に来ることもない。
フェイト宅で世話になったりしたりで数日。その顔を一度も見た事はない。
会話の中で何度か母親の話題が出たことはあったが、フェイトもアルフも話し辛そうな空気をかもし出す。
（母親と上手くいってないのか？　訊こうにも内容が内容だしなぁ……ヘタに突っ込めば薮蛇になりかねんし……最悪、いま以上に関係が悪化する可能性だってあるワケだ……）
どうしたもんか、と思案しながら男湯の暖簾を潜ろうとした瞬間

「なんでアンタがここに居るのよーーーーーーーー！？」

浴場前広場に聞き覚えのある声が響いた。

声のした方向を見れば、

「げっ、ビリビリ！？」

なのはと彼女の友人を連れた御坂美琴が、こちらを指差しながら立っていた。

第０９話　海鳴温泉（後書き）

中途半端なところで切ってしまったので、続き早く書き上げます。

一年前のモチベーションを取り戻さねば……！

第１０話　和解とすれ違い（前書き）

読み返したらユーノが悪者のように表記されていた為、急いで修正。

ゴメンね、ユーノくん

第１０話　和解とすれ違い

（……なんでこうなったんだっけ？）

御坂美琴は考えていた。

彼女は学園都市でも7人しかいないレベル5、その中でも第三位に君臨する人物だ。その実力は大概の人間が勝負を始める前から敗北を悟るほどだ。

そんな彼女は今、“とある”危機に直面していた。

それは

「美琴さん！　あの人はどなたなんですか！？」

「お知り合いのようでしたけど……」

「カレシ？　カレシなんでしょ！？」

年少三人組による怒涛の質問攻撃。

レベル5、第三位にも得手不得手はあるのだった。

そもそもの始まりは“アイツ”こと上条当麻を発見したことだった。

つい大声を出してしまい、それによって相手もこちらに気付いた。

しかし、向こうは自分の顔を確認すると、そそくさと暖簾の奥へと逃亡。

その一連の行動に腹を立て、いつものクセで電撃を放ってしまう。

幸い、人もほとんどおらず、物的被害もなかったが、直後に近くでちょっとした騒ぎが。

当然だろう。ここは学園都市ではない。超能力なんてものは存在し

ない世界。事情を知っているなのははともかく、アリサ、すずかにとって「それ」は未知なるものだ。
気味悪く思われたか、と心配になったが、むしろ目を輝かせて迫ってきた。
そのことに安堵しつつ、当たり障りのない範囲で説明。どうにか納得してくれた。

が、本当に大変だったのはここからだった。

温泉に浸かった瞬間、三人が急接近。
何事かと思いきや、あの男の人は誰か、どんな関係か、いきなり攻撃したが大丈夫なのか、と矢継ぎ早に口撃が放たれて。
無関係を主張するも捌き切れず。

そして冒頭の集中砲火に繋がる。
まず、自分がやるべきことは一つ。
とりあえず、この子達がしている誤解を解かなければ。

「ちょ、ちょっと待ってみんな！　別にア、アイツとは、な、なんともないからね！？」

若干戸惑いながら、彼女たちが想像する間柄でないことを主張する。
すると

「「「「へっ？」」」」

三人とも意外そうな顔をする。

「いや、なにみんな『違うの？』みたいな顔してるの？」
「だって向こうも御坂さんの事を知ってたみたいですし……」

「いきなり攻撃を加えた、っていうのは相手のことをよく知ってるからじゃないんですか？」
「で、向こうもなんか慣れた感じで対応してたでしょ？　つまり二人はそれだけ勝手知ったる仲ってことよね？　カレシ？　やっぱカレシなんでしょ！？」
「だから違うって！！　アイツは彼氏なんかじゃなくて、えと……宿敵、そう！　倒すべき相手なのよ！！」

言葉の勢いそのままに、湯船にいきり立つ美琴。

「宿敵、ですか……？」

予想外の発言にキョトンとするなのは。

「えぇそうよ。アイツは毎回私を無視するし、決着つけようとしても手ぇ抜くし、なんかいつも女の子はべらかしてるし……あ～！思い出しただけも腹立つ！」

乱暴に頭を掻き毟る。
そんな美琴の様子を見て苦笑するなのはとすずか。
そうなると気になるのは、彼の人となりだ。

「じゃぁなに？　ソイツってそんなにイヤなやつなの？」

代表としてアリサが尋ねる。
すると、美琴の表情が一変。

「イヤ、そういうのとはちょっと違うというか……いい所もあるのよ。私がどうしようもない状況になった時には助けてくれたし、知り合いの中にもアイツに助けられた子だっているし……ただ、どう

しようもないお人好しだから心配というか……」

顔が赤いのは温泉のせいか否か。

（美琴さん、説得力がないですよ……）

（やっぱり彼氏さんなのかな？）

（いや、片思いなんじゃない？）

美琴の思惑とは逆に、かつ事実に近い形で二人の関係は三人に認識された。

※※※※※

上条当麻は目の前で起きていることが理解できないでいた。

「初めまして。僕はユーノ・スクライアといいます。御坂さんの知り合いのようでしたので、お話しをうかがいたいんですが……」

先の騒動でこちらに紛れ込んだのだろう、なのはの肩にいたフェレットがしゃべっている。

この世界に来てから、自分は何度驚いているんだろうか。

「お、おぅ。上条、上条当麻といいます」

「はい。上条さん、よろしくお願いします」

「なんかもう、これ以上はないって位驚いてる気がする……」

これにはユーノも苦笑気味に答える。

「まぁ、次元移動なんて普通の人はしませんものね……？」
「次元移動？」
なにやら新しい単語が出て来た。
「世界というモノが一つの空間であることはご存知でしょうか？」
「あぁ。確か色んな法則が複雑に入り混じって、そうなってるんだっけっか。前に御坂から聞いたけど……」
その話、半分も理解できたか正直自分でも怪しいが。
「そういった世界は無数にあって、場所によって技術の発展具合には差がでます。その中には異世界へ移動する理論・手段を確立する世界もあります」
「それが次元移動ってやつか」
「はい。ただ、お二人の場合は少々事情が変わってきます」
「えっ？　どういう事だ？」
1拍置いて説明を続ける。
「通常の次元移動は、目的地の世界に影響が出ないように綿密に計算して行います。僕らの一族もそうやって渡り歩きました。しかしお二人の場合、“ひずみ”に巻き込まれるカタチでこの世界に来ました。通常ならばあり得ないことなんですが……」
“ひずみ”についても御坂から説明は受けている。セキュリティ・ホールのような“現象”が自分達をこの世界に引き寄せた原因だという。
それを聞いたとき、当麻は違和感を覚えた。
飽く迄“ひずみ”はその世界の規則性・法則性の中で生まれる「誤

差」である。

つまり、他の世界に影響を与えるはずがないのだ。

「その原因ってユーノわかるか？」

「それは、今の僕には何も……すいません。お役に立てなくて……」

「気にすんなよ、そういったら俺だって同じなんだし……」

苦笑混じりで会話する二人（一人と一匹？）。

「あ、そういやユーノ、一つ聞いてもいいか？」

「はい、僕で答えられることなら……」

「なのは、だっけっか？　あの子、なんでジュエルシードを集めてるんだ？」

あの日から当麻は考えていた。

私利私欲の為ならば御坂が止めるだろうし、その彼女が友人の手伝いと言っていた。

おそらく友人とは、目の前にいるユーノのこと。

下手すれば命の危機すらあり得るこの仕事を、なぜ彼女はやり始めたのだろうか。

「……僕の、せいなんです」

俯くユーノ。表情には後悔と罪悪感、そして自身の無力感に対する苛立ちが窺えた。

「どういうことだ？」

「スクライア一族は遺跡の発掘を生業としているんです。僕も様々な世界を訪れました。ジュエルシードはもともと僕が発掘したもの

なんです」
「っ！！」

当麻にとって、それは衝撃の告白だった。

「その輸送中に事故が発生して、ジュエルシードは散らばってしまいました……すぐに僕は回収に努めました。けど、この世界で怪我を負ってしまって……」
「そこでなのはと出会った、てワケだ」
「はい。いまでも思うんです。僕がもっとちゃんとしていれば、こういう事にはならなかったんじゃないかって……」

重い表情のまま、ユーノは胸中を吐露する。

「僕がもっとしっかりしていれば、なのはをこんな危険な事に巻き込まずに済んだのに……」
「それは違うんじゃないのか、ユーノ？」
「えっ？」

当麻の言葉にユーノは言葉を止めた。

「確かにジュエルシードを見つけたのはお前だ。けど輸送中の事故はお前の責任じゃないし、そのことに責任感じてずっと一人で作業してたんだろ？　むしろ俺はよくやってると思うぞ」
「上条さん……」
「ってか、無理しすぎだろ。ユーノっていくつなんだ？」
「え～っと、９歳になります」
「９！？　フェイトと同い年じゃねぇか……」
「フェイト？」
「いま俺が世話になってる子。ほら、あの金髪の……」

「あぁ、あの子ですか。なぜ、あの子はジュエルシードを集めてるんですか？　危険な物であることは知っているハズですが……」
「母親の為だって言ってたけど、なんか複雑みたいでさ……その、あいつ自身はいいやつなんだよ。この前もなのはを傷つけたこと気にしてたからさ……」
「そうでしたか……」
「このままじゃいけない、俺もどうにかしたいと思ってる。こっちでも色々やってみる。だからさ、独りで抱え込むなよ。お前にも仲間はいるんだからさ……」
「上条さん……」

憑き物が取れたように、どことなくユーノの表情が明るくなったのがわかった。

「てか、そのちっこい体で発掘とかしてたのか？　スゴいな、スクライア家って……」

フェレット姿のユーノを眺めながら呟く当麻。

「いえ、この姿は魔力を温存するためで僕自身は人間ですよ？」
「え！？　マジで！？」
「はい。ある程度傷も癒えたようですし、大丈夫かな」

すると、ユーノの体が光り出す。
光が収まったとき、そこには一人の少年が立っていた。
ローブを身に纏った金髪の少年。

「……あの、ドチラ様でせうか？」
「僕ですよ！　ユーノ、ユーノ・スクライア！」
「悪ぃ、余りにも変化が劇的だったから……」

まぁ、この状況なら誰でも驚くだろう。
「（ユーノくん、何かあったの？）」
「（うぅん、なんでもないよ、なのは）」
なのはの念話が響いた。彼の叫びに似た声が仕切りの向こうに聞こえたようだ。
「（お話が終わったらこっちにおいでよ。一緒に温泉に入ろ）」
「（あ、あぁ、うん……）」
実は双方の思い違いから、互いの認識がずれていたりする。
その為、なのはは彼が人間であることを知らないでいる。
まぁ、その話はまた後日。
深いため息をついた彼を見て、シンパシーを感じた当麻。
「なんか、お前も苦労してるみたいだな……」
「えぇ、まぁ、いろいろと……」
この二人、案外似た者同士かもしれない。

※※※※※
時は進み、夜。
夜の帳に突如、閃光が立ち上がる。

ジュエルシードが覚醒した徴(しるし)だ。

「ビンゴ！　見つけたよ、フェイト！」

光を見つめるアルフ。

「スゲェな……」

呆然と眺める当麻。彼女達とともにこういった現場は何度も見てきたが、今まで以上の迫力に圧倒される。

「なんか、過去最高の力強さだな……」

「随分、不安定な状態だけどね」

「……あんたのお母さんはなんであんなモノ、ほしがるんだろうね……？」

アルフがフェイトに訊ねる。当麻からの疑問でもあったが、彼女自身も気になっていたのだ。

「さぁ、わからないけど、理由は関係ないよ……母さんがほしがってるんだから手に入れないと……」

近くで桃色の光が上がる。

なのはの魔力光だ。おそらく美琴もいるだろう。

集中するように閉じていた目をスゥッ、と開ける。

「バルディッシュ、起きて！」

《Ｙｅｓ　ｓｉｒ》

バルディッシュを起動、シーリングフォームに移行する。

「封印するよ。アルフ、当麻、サポートして！」
「ＯＫ！」

フェイトは封印作業の主立った部分を
アルフはバインドなどのサポートを
そして、当麻は作業中に起きる不測の事態の鎮圧をそれぞれ担当してきた。
いくら万全を期しても、ジュエルシードが暴走するときがあり、その際に発生する魔力を押さえ込むのが彼の仕事だ。
今のところ、彼の出番はないが、そういうことはないに越したことはない。

そして

「……封印、完了」

フェイトの手元に無事、舞い降りる。
そこへ響く複数の足音。
音源を見ればなのはとユーノ、そして美琴の姿があった。

「ア～ララ、来ちゃったか～」
「それを、ジュエルシードをどうする気だ！？　それは、危険なものなんだ！！」
「さぁねぇ？　答える理由が見当たらないよ？　それにさぁアタシ親切に言ったよね？　イイ子でないとガブッといくよ、って……」
その言葉にたじろぐなのは。
「……アルフ、いつ言ってたんだ？」

話の具合からこの二人、一度会っていたようだが当麻の記憶にはない。

「ん～？　当麻が温泉入ってるときにちょっとね」
「おかしな挑発すんなよ……」
「こうでもしないと張り合いがないんだ、よ！」

ここでアルフに変化が起きる。
髪が急激に伸び、骨格も人のものから離れていく。
アルフが元いた場所には朱色の狼が雄雄しく立っていた。

「えっ、アルフ！？　アルフなのか！？」
「あれ、当麻は知らなかったっけ？」
「まぁ、よくドッグフード食ってたから前世はイヌなのかなぁ、と……」
「アタシは狼だよ！！」

緊迫した空気の中、妙に間延びした雰囲気が生まれる。
ただ、未だ唖然とするなのはの肩でユーノは断言した。

「やっぱり……あいつ、あの子の使い魔だ！」
「使い魔？」
「そうさ。アタシはこの子に作ってもらった魔法生命。製作者の魔力で生きる代わり、命と力の全てを懸けて護ってあげるんだ……」

後ろを振り返り、フェイトと当麻に語りかける。

「先に帰っててフェイト、すぐ追いつくから。当麻、フェイトを護ってあげて」

「うん、無茶しないでね？」
「あ、あぁ、わかった……」
返事を聞くと勢いよく飛び掛る。
なのは達まであと数メートル、その瞬間。
彼女の体は障壁に阻まれた。
「チィ！」
「なのは！　あの子をお願い！！」
足元には魔方陣を展開させたユーノ。小柄でありながら自身の数倍ある体躯をもつアルフを止める。
「させるとでも、思ってんの！？」
障壁に爪を立てて、破ろうとするアルフ。
「させてみせるさ！！」
膠着状態からもう一つの魔方陣を展開する。
「移動魔法……マズい！」
「はぁっ！！」
若葉色の光が弾け、気付けば二体は消えていた。
「えっ、ユーノくん、どこ行ったの！？」
美琴が辺りを見回すも両名の姿はない。

「結界に強制転移魔法……いい使い魔を持っている……」
「ユーノくんは使い魔ってやつじゃないよ。あたしの、大切な友達……」

しばし、両者の睨み合いが続く。

「……で、どうするの？」
「話し合いで、なんとかできるってこと、ない？」
「わたしは、ロストロギアの欠片を、ジュエルシードを集めないといけない。そして、あなたも同じ目的なら、わたしたちはジュエルシードをかけて戦う敵同士ってことになる」
「だから！　そういうことを、簡単に決め付けない為に、話し合いって必要なんだと思う！」
「……話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ、きっと何も変わらない。伝わらない！」

バルディッシュを構え、なのはの背後に瞬時に回りこむ。

「っ！！」

ギリギリで反応、フェイトを視界に納める。
どうにか横薙ぎを屈んで避ける。

杖を構え直すフェイト。
追撃を飛んで回避しようと瞬間
なのはの視界がグルリと回った。

「ふぇ！？」

突然のことに混乱するなのは。それは彼女だけではない。フェイトもまた、目標が目の前から消えたことに動揺していた。

「大丈夫？　なのはちゃん」

「み、美琴さん……」

抱え込んだ状態でなのはに訊ねる美琴。電撃で脚力を一時的に増強し、地を蹴った勢いそのままに彼女を抱きかかえ、近くの茂みまで離脱したのだ。

「また随分な言い様ね。こっちの話聞いてんのかしら？」

元いた場所、正確にはフェイトを見ながらボヤく美琴。件の少女はなにやら当麻と話している。

「でも、だからって、こうやって争うのは、違うと思います……」

「……そうね。出来る範囲で私も協力するから、諦めないでね」

「はい！」

「それにアイツもいるんだし、悪いようにはならないわよ」

「そうなんですか？」

「えぇ、そういうヤツなのよ、アイツは……」

一方、当麻・フェイトの二人はというと……

「待てよフェイト！　落ち着けって！」

「放して当麻！　なんで止めるの！？」

美琴たちが消えた茂みへ突入しようとしたフェイト。しかしそれは彼女の腕を掴んだ当麻によって阻まれた。

「目的が一緒なら手を組める。いがみ合う理由だってないだろ？
なんで自分からその手を振り払うんだよ！？」
「ジュエルシードを集めるのが私の役目。あの子が持ってるならそれを手に入れる……！」
「だめだ！　それってお前がなのはを傷つけるってことだろ！？
そんなことしなくても話せばわかってくれるハズだって……」
「そんなハズない！　言葉に意味なんてない！　分かり合うなんて……」
「じゃあフェイト。お前はなのはの言葉を聞いたか？」
「え？」

腕に込めていた力が抜けた。

「なのはが言おうとした事、全部聞いたか？　お前の思い、なのはに言ったか？」
「言葉だけじゃ、何も変わらない……それが私の思い「違うだろ！」っ！？」

突如、大声を上げた当麻を見る。
そして気付いた。彼の目に「力」が宿っていることに。

「なんでやる前からできないなんて決め付けるんだよ！？　フェイトだって誰かを傷つけるのはイヤだろ！？　お前が本当に思ってること、なのはに言葉で伝えろよ！」
「私が、本当に思っていること……」

目を伏せ、思案するフェイト。

「……わたしだって、できるなら戦いたくない。でも、ジュエルシードの収集は私の仕事。私がやらなきゃいけないの。あの子にはま

かせられないよ……」
「なら、それをなのはに伝えようぜ」
「でも……」
「大丈夫だって。もしダメでもそれが無駄になる訳じゃないんだ。やれるだけやってみようぜ」
「……うん！」

フェイトの意思を確認し、茂みの方を見る。

「御坂ー。こっちはいつでもいいぜ」

声を掛けると、向こうから御坂・なのはの両名が姿を現す。

緊張と緊迫が場を支配する。
それを破ったのは

「えっと、初めまして、かな？」

なのはだった。

「あたし、高町なのは。あなたの名前、聞かせてほしいな」
「……フェイト。フェイト・テスタロッサ」
「あのねフェイトちゃん。話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど、だけど、話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきっとあるよ」

依然、フェイトの表情は険しい。

「ぶつかりあったり、競い合うことになるのは、それは仕方ないのかもしれないけど……だけど何もわからないままぶつかり合うのは、

あたしイヤだ！」

誰も、彼女の思いの吐露を邪魔することはなかった。
フェイトも無言を貫いたままだ。

「そのジュエルシードを集めるのは、それがユーノくんの探し物だから。ジュエルシードを見つけたのはユーノくん。ユーノくんがそれを元通りに集め直さないといけないから、あたしは、そのお手伝いで……」
「……」
「だけど、お手伝いをするようになったのは偶然だったけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めてる。自分の暮らしている街や、自分の周りの人たちに危険が降りかかったらイヤだから」

意を決して、なのははフェイトを見つめた。

「これが、あたしの理由！」
「……！」

ここでフェイトの表情に大きな揺らぎが生じた。
苦悶の表情を浮かべ、目を瞑る。

「……わたしは」
「フェイト！　答えなくていい！」

が、ここで乱入者が現れる。

「っ！！」
「アルフ！？」

ユーノを追いかけているうちに、ここに行き着いたらしい。発破をかけるようにアルフが呼びかける。

「優しくしてくれる人たちのトコで、ぬくぬく甘ったれて暮らしてるようなガキンチョになんか、何も教えなくていい！」

「えっ……！？」

「アタシたちの最優先事項は、ジュエルシードの捕獲だよ！」

内心で舌打ちする当麻。あと少しで和解できると思っていた矢先にきてしまうとは。不幸としか言い様がない。

「……！」

垣間見えた表情を無に塗りつぶし、杖を構え直すフェイト。

「やめろフェイト！　考え直せ！」

フェイトの目の前に立ちはだかる。

「当麻……当麻は私とあの子、どっちの味方なの？」

「俺は、どっちの味方でもねぇ。ただ、これ以上二人が傷付きあうのが、俺はいやなんだよ！」

「傷付き、あう……？」

「傷付けあう」のではなく「傷付きあう」。

彼女たちが戦って、怪我をすることを言っているのではない。

互いに傷付けあい、互いに心を痛めることを言っているのだ。

「アンタ……」

「当麻……」

握っていた杖を下ろす。
その時
「うぉおおおおおおお！」
なのは目掛け、アルフが飛び掛ってきた。
いつまでも動かない状況に痺れを切らしたのだろう。
「クッ！！」
いち早く反応したのは美琴。
なのはとアルフとの間に割って入り、手に電気を溜め込む。
一方のアルフは美琴もろとも殴りかかろうとしている。
美琴が彼女に電撃を放った瞬間
影が割り込んだ。
それに触れた瞬間、電撃は甲高い音とともに霧散した。
当麻が幻想殺しで打ち消したのだ。
だが、彼にはそれが限界だった。
彼の背後には拳を振り下ろすアルフの姿。
彼女も当麻に気付いたが、その軌道を修正するのが精一杯。
どうにか、逸らすも彼女の右手は当麻の側頭部を掠めた。
魔力で増強された拳はそれだけで脅威だった。
触れた衝撃で脳震盪を起こし、地面に崩れ落ちる。
「アンタ！」

「と、当麻！」
急いで彼の元に駆け寄る。
脈拍を測定し、呼吸の有無を確認。
どうやら気絶しているだけで、命に別状はないようだ。
「アンタァ……！」
アルフを睨み付ける美琴。
興奮し、バチバチ、と全身を電気が迸る。
目の前ではアルフが狼狽している。
が、なにかに足首を掴まれたと同時に、身に纏った電気が消えた。
「やめ、ろ、御坂……」
「えっ？」
足元を見れば、息も絶え絶えに必死に美琴の足を右手で握る当麻の姿。
「ア、アンタなに言ってんのよ！？　アンタに怪我させたヤツなのよ！？」
「アルフも、ワザとじゃ、ねぇんだ……勝手に、前出た、俺の、せいだ……」
皮膚の切れた頭部から血を流し、話す言葉は尻すぼみになるが、足を掴む腕力は緩まない。
「だから、アルフのこと、責めないでくれ……」
「けどアンタ……」

「俺なら、大丈夫、だからさ……」
言うと同時、当麻は気を失った。
「……アルフ、当麻をおんぶして」
「フェイト？」
「今日は、撤退しよう……」
「……わかったよ」
人型に戻り、当麻を抱えるアルフ。
彼女も、間近にいる美琴も、互いに対して複雑な表情を浮かべる。
「なんか、ごめんね。こんなことになるなんて……」
「アイツはああ言ってたけど、私は簡単に許さないわよ」
「ホントに、ごめん……」
交わされた言葉はそれだけ。
込められた感情は、これには収まらない。
そして、立ち去ろうとするフェイトたちに
「ま、待ってフェイトちゃん！」
なのはが呼びかける。
「……」
「あの、今日はフェイトちゃんのお話、聞けなかったから……今度会ったら、あなたのお話、聞かせてほしいの！」
「……次に会ったら、たぶん、また戦うことになるよ」
「それでも、あたしはフェイトちゃんとお話したい！」

「……考えとく」

そう言い残し、この場を飛び去る。

なのはも美琴も、その姿が消えるまで見つめていた。

第１０話　和解とすれ違い（後書き）

しっかり校閲したハズだったんですが……

前に言った通り、次は３週間で書き上げる予定です

第１１話　三人目の魔導師（前書き）

予定より一ヶ月遅れてしまいました。
待ってた方、すいません。

展開に迷い、キャラと発言の齟齬に悩みながら、どうにか完成。

当初のプラン、半分壊れました。

第１１話　三人目の魔導師

「んっ……」

上条当麻が目を覚ますと、そこはフェイトの家だった。

「ってて……」

ズキン、とこめかみに痛みが走る。
反射的に手をやると、そこには包帯が巻かれていた。血は止まっている。
枕元のデジタル時計を見て、あれから半日経ったことを把握した。

「大分、眠ってたんだな……」

外を見れば、部屋を明るく照らす太陽が浮かんでいる。
日光が明るく照らすドア。そのドアノブが回る。

「よかった！　当麻、目が覚めたんだね！」

奥から顔を出したのはアルフだった。

「大丈夫かい当麻？　やっぱりまだ痛むかい？」
「まあ、少しだけ……一応平気だと思うぞ」

手を握る、開くなどして違和感はないか確認する。

「ゴメンよ当麻。アタシのせいで……」

「アルフのせいじゃねぇよ。あの時も言ったろ？　咄嗟に前出た俺が原因だよ」
「うぅん、戦況をきちんと把握しなかったアタシにも非はあるよ」
「あー……まぁ、ここはお互い様ってことで……」
「なんか釈然としないけどねぇ……」
「あ～！　この話終わり！　これ以上引きずったらなんか暗くなるから！」

当麻の一声で強制終了。

「あれ？　そういやフェイトは？」

以前は目覚めるとすぐに駆けつけてくれた彼女の姿がない。

「フェイトなら部屋にいるよ。あれから閉じ篭っちゃってさ……」
「俺が、倒れたからか……？」
「それもあるけど……なんか悩んでるみたいなんだよねぇ……」
「やっぱり、ホントは迷ってたんだな……」

だとしたら、自分のしたことは余計なお節介だったろうか。

「『やっぱり』ってどういう事だい、当麻？」
「フェイトに言ったんだよ。本当に思っていることを相手に伝えろって……」
「なんだってそんなことを……」
「アイツ、自分の気持ち押し込めて、苦しそうだったからさ……たとえ結果が同じだとしても、それがフェイトの為になると思ったんだ」
「当麻まで……なにあのガキンチョみたいなこと言ってるのさ！？」
「なら、フェイトを苦しめてまで、今みたいなこと続けるっていう

のか！？」
「そ、それは……」
「それにアルフ。お前、あの時フェイトに言ったこと覚えてるか？」
なのはと対峙したとき、心に迷いが生じたフェイトに彼女は叫んだ。
『優しくしてくれる人たちのトコで、ぬくぬく甘ったれて暮らしてるようなガキンチョになんか、何も教えなくていい』
なのはのことを罵倒しているだろうこの言葉。
しかし、裏を返せば
「それって、フェイトには優しく接してくれる人がいなかったって事だろ！？」
「っ！！」
アルフの顔に失態の色が浮かぶ。
意図せず、「事情」の端を知られてしまった。
「ハァ、こういう形で知られるなんてねぇ……当麻ってホントは頭イイ？」
「補習の常連組の一人だよ、俺は……それで、話してもらえるか？」
観念したのか、息を吐きながら肩を落とす。
「ハァ、こうなったら話すしかないね……」
ゆっくりと、彼女は語りだした。
「実はあの子、母親とうまくいってないみたいなんだよ」
それを聞いたとき、当麻の心境は驚きよりも納得が勝(まさ)っていた。

家族の話を振れば、彼女はいつもそれとなく逸らしていた。
「うまくいってないって……なんでだよ？」
「それは……」
言いよどむアルフ。
途切れた言葉を繋いだのは
「私ね、母さんに嫌われてるの……」
他でもない、フェイトだった。
「フェイト、話してもいいのかい？」
「うん、当麻になら大丈夫だよ……」
アルフと話しながら当麻のワキへ座る。
「フェイト、嫌われてるってどうしで……？」
首を横に振る。
「わからない。昔は優しかったんだけど、いつからか私につらく当たるようになって、それ以来ずっとこの状態なんだ……」
「つらく、当たるって……」
「……フェイトとアタシで、報告に行くときがあるだろ？　その時にその子……ぶたれてるんだよ」
「！！　そんな大事なこと、なんで言わなかったんだよ！？」
転移魔法を使う関係上、当麻は彼女たちを迎えるかたちになる。思い返せば、戻ってきた日に限って動作が緩慢だった。

まるで、傷だらけの全身を気遣うように。

「当麻は優しいから……このことを伝えたら、当麻も背負おうとするでしょ？　嬉しいけど、これは私と母さんのことだから……出来るだけ、自力で解決したかったんだ」

「……わかった。けど、ここまで聞いた以上、俺も協力させてもらうぞ」

「うん。もう隠せないからね。今まで黙っててゴメンね」

「別にいいって。ただ、ひとつ訊かせてくれ」

「？　うん……」

「えっとさ……どんなひどい目に遭わされても、それでも母親の為にジュエルシードを集めるのは、なんでなんだ？」

「……母さんのこと、好きだから」

はっきりと断言した。

「母さんがほしがってるから。私は母さんの力になりたいんだ」

その目には何事にも揺るがない「光」が宿っていた。

「……そっか、そうだよな。フェイトも頑張ってんだ。お前の母さんだっていつかわかってくれるさ」

そう言いながら、彼女の頭を撫でる。

「う、うん……！」

頬を赤く染めながら答えるフェイト。

「え～っと、邪魔ならアタシ、部屋出ようか？」

「ア、アルフ！」
「邪魔ってなんだ！？　なんでそんな結論になるんだ！？」
「いや、なんかイイ雰囲気だったし……」
「なに勝手にラブコメ臭察知してんだ！？　俺とフェイト、そんな関係じゃないからな！？」
「えっ……？」
「待てフェイト。なんで傷付いたような顔してんだ？」
「……当麻って鈍感だね」
「おいそこ。なんの話だ？」
「べっつに～。なんでもないよ～」
「なんなんだよ、これ！？　あーもう、不幸だー！」

報われてほしい。
心から願った。

※※※※※

「……で、上条当麻を迎えに行くのについて来いって言うのかい、君は？」
「ま、そーいうことですたい」

学園都市の中にも教会はある。
土御門はそこにいた神父と会話していた。

「まったく、なんで僕のところに来た？」

2メートルを超える長身。長い髪は赤く染められ、右目の下にはバーコード状の刺青が彫られている。
おまけに周囲には香水の匂いを漂わせている。見た目からして怪し

さ満天だが彼、ステイル＝マグヌスはれっきとしたイギリス清教の神父だ。

「仕方ないだろ？　アレイスターが関わる以上、無闇に能力者を連れて行く訳にはいかない。超能力者ならと思ったんだが、唯一の知り合いは電話にも出やしない。魔術師側でカミやんの味方と言える人物は少ない上に、今からこっちに来ようとするなら時間が掛かり過ぎる」

普段のゆるい口調ではなく、真面目な雰囲気で現状を語る土御門。

「そこでたまたま学園都市に来ていた僕に白羽の矢が立った、というワケだ……」

「ま、そういうことだにゃー」

「他に助っ人はいるのか？」

「残念ながら。禁書目録も連れて行こうと思ったんだが、彼女の知識が向こうで役立つ保障はない。今回は舞夏のトコでお留守番ですたい」

「まったく、面倒なことをしてくれるな、上条当麻は……」

愚痴をたれつつ、出口へ向かうステイル。

その後ろを土御門はついていく。

「それで、具体的にはどうすればいいんだい？　その“並行世界”とやらは簡単には行けないだろう？」

「その辺りはアレイスターが手を打っているぜぃ。ヤツにとっても、上条当麻は欠くことの出来ないファクターだからな……」

協会から出るなり、ステイルは懐からタバコを取り出し、火をともした。

「早く行くぞ。あの子の泣き顔は見たくない」
「なら早速行くとするかにゃー。カミやんのいる“世界”へ……」

※※※※※

「そうか、ケンカしちゃったんだ……」
「違うよ。あたしがボーっとしてたから、アリサちゃんに怒られた、てだけ……」

日の沈みかけた朱色で染まる室内。
学校から帰ったなのはだったが、どうも様子がおかしい。心配になったユーノと美琴が問い掛けると、彼女は苦笑気味に語った。

「アリサちゃんとすずかちゃん、だっけ。親友なんでしょ？」
「はい、入学してすぐの頃から、ずっとです」

その言葉を聞いたユーノの表情が曇る。
温泉での一幕。
そのとき出会った金髪の少女、フェイト。
そして、彼女の使い魔に言われたあの言葉。

彼女はそれを気にしてるのだろう。
相談できればいくらか楽になるだろうが、なにせ事には「魔法」が絡む。相談できる人間はおのずと限られてくる。
独りで思い悩み、友人に訊ねられても何も言えず、その結果仲違いしてしまったのだ。
そんななのはに対し、二人は何も言えない。何から言えばいいのか、わからない。

「はい、ユーノ君」
「えっ？」
突然なのはから、たい焼きを半分手渡されたユーノ。
「美琴さんもどうぞ」
「あ、ありがとう……」
呆気にとられつつ、美琴も受け取る。
「明日は塾もありませんし、一緒にジュエルシードを探しませんか？」
笑顔で話すなのは。
けれど彼女の性格を知っている者ならわかる。
なによりも美琴自身、少し前までこんな顔をしていた。
だから、はっきりと断言できる。
「なのはちゃん、無理しないで」
「ふぇ？　美琴さん？　あたし無理なんて……」
美琴は首を横に振り、彼女の言葉を切った。
「なのはちゃんって、なんかあると全部独りで抱え込むクセがあるでしょ？　もしかしたらケンカの原因もそれかもしれないわよ」
「えっ？」
「たぶん、二人ともなのはちゃんに頼ってほしいのよ。けど、肝心のなのはちゃんは何も言わない。もちろん事情が事情だから、言えないってこともわかるわ。でも、二人にしてみれば苦しんでる親友が頼ってくれない。もし、なのはちゃんだったら、どう思う？」

逡巡の後、彼女は結論を口にした。

「……すごく、悲しいです。少しでもいいから……あっ！」

「つまり、そういうこと。明日、ちゃんと二人に謝ろうね」

「はい！」

パァ、と表情が明るくなる。彼女本来の明るい笑顔だ。

「でも、あの……二人には、なんて言って相談すれば……？」

「それこそ簡単よ」

人差し指を立てながら、答える。

「『お話したい子がいるんだけど、どうすればいいかな？』ってね。親友なんでしょ？　きっと答えてくれるわよ」

「はい！」

「……ってまぁ、私も人の事は言えないんだけどね……」

タハハ、と苦笑する美琴。

「？　美琴さんも、ですか？」

「うん。私もちょっと『どうしようもない事』にぶち当たってね……出来る限りの手は打ったけどそれもダメで、遂には行き詰まって私が死ぬしかないって状況になったの……」

美琴の「死ぬ」発言に、なのはとユーノの表情が強張る。

「でもね、そんな時にアイツは手を差し伸べてきた。自分には関係ないことなのに、何度傷付けられても、その度に立ち上がって……」

「それで、どうなったんですか？」
「それがね、次の日には全部解決。悩んでたのが嘘みたいにね……」
「え？　そんな簡単にですか？」
「うん、詳しいことは端折るけどね。ただ、アイツは入院しちゃってさ。それでお見舞いに行ったとき、ソイツに言われたの。『お前は笑って良いんだよ』って……私のせいで犠牲になった子はいるのに、それでも『その子達は絶対に、お前がたった一人で塞ぎ込む事なんか期待してないから』ってさ……」
「あの時」を思い出しながら、耽（ふけ）るように語る美琴。
「そんな事が……」
想像でも遠く及ばない黒い話にユーノは戦慄を覚えた。
上条当麻も、御坂美琴も、様々な死線を潜り抜けたのだろう。
「それじゃあ……」
ただ、
「その時に、美琴さんは上条さんのことを好きになったんですね」
なのはの言葉で、美琴は別種の戦地へと投げ込まれた。
「イヤ、なのはチャン？　何度も言ってるケド、ワタシは別にアイツのことはナントモ思ってないからネ？」
「み、美琴さん？　片言になってますよ？」
「ななな何言ってるの私は冷静よヘンなこといわないでほしいわネェ」
「でも、すごい方ですよね、上条さんは……」

「うん、素敵な人だね。今度会ってみたいなぁ……」
彼女の何とはなしの呟きに、美琴の動きが止まった。
上条当麻と言えば

1．不幸体質
2．超の付くお人好し
3．第一級フラグ建築士

重要なのは3。
そう、フラグ建築士。
出会った女性に対して、彼が立てる旗は見境いがない。
それこそ上は熟女、下は幼女まで。
下手すれば彼女も毒牙に掛かりかねない。
（どうしょう……なんて切り出そう……）
暫し、考える為の時間がほしい美琴だった。

※※※※※

夜。とあるビルの屋上に二つの影が降り立った。
フェイトとアルフ、二人のものだ。
「大体この辺りだと思うんだけど……おおまかな位置しかわからないんだ……」

「ハァ……確かにコレだけゴミゴミしてると、探すのも一苦労だねぇ……」

市街地。それが今回、ジュエルシードがあるとおぼしき場所だった。
周りにはまだ喧騒が残っている。
当麻は街の中に待機してもらった。

「ちょっと乱暴だけど、周辺に魔力流を打ち込んで強制発動させるよ」

バルディッシュを振り上げるフェイト。
だが

「あぁ待った！　ソレ、アタシがやる」

アルフが遮った。

「大丈夫？　結構疲れるよ？」

そんなフェイトの心配を「フンッ」と払い飛ばす。

「このアタシをいったい誰の使い魔だと？」

優しい使い魔の心遣いを感じ、笑みがこぼれる。

「じゃあ、お願い」
「よし、そんじゃあ！」

足元に魔方陣を展開。魔力を流し込む。
すると天候が急変、街中に雷が降り注ぐ。

そして

「っ！　見つけた！」

光の柱が一本、立ち上がる。

だが、朗報だけとはいかなかったようだ。

「けど、あっちも近くにいるみたいだねぇ」

広域結界が市街地を包む。なのはの元にいた、彼女の「友達」が発動したのだろう。

「早く片付けよう……！」

愛機を構え直す。主の意思に反応、バルディッシュはシーリングフォームへ移行する。

それと同刻。

「お願い、レイジングハート！」

なのはも封印作業に取り掛かっていた。

彼女もレイジングハートをシーリングフォームに移行。ジュエルシードを狙う。

しかし、ここで予期せぬ事態が起きた。

二人ともほぼ同時に目標を捕らえたのだ。
「リリカル、マジカル！」
「ジュエルシード、シリアルＸＩＸ……！」
「「封印！！」」
金色と桃色の光がぶつかり合うのは同時だった。

※※※※※

光の奔流が治まったとき、封印されたジュエルシードはそこで浮かんでいた。
ゆっくりと、それに歩み寄るなのは。
「なのはちゃん、大丈夫！？」
後ろから美琴とユーノが追い着く。
なのはは振り返らない。
なぜなら、
「……」
視線の先。そこにフェイトの姿があったからだ。
さらに、
「フェイト！」
「どうなった、フェイト！？」

アルフ、上条当麻も合流する。
目の前にいる少女と話したい。
彼女の助けになりたい。
母親の手助けをしたい。
主を守りたい。
皆に戦ってほしくない。
この場にいる全員の思いが交差する。

その時

脈打つようにジュエルシードが光り出した。

「っ！」
「えっ！？」
「うそっ！？」
「そんなっ！！」
「なんだ！？」

均衡を保っていた雰囲気が、一点に集中した。
鼓動するジュエルシード。ドクンッ、ドクンッ、とその回数毎に魔力が増していく。
「マズイ、ジュエルシードが暴走しかけています！」

ユーノの言葉は、その場に戦慄を走らせた。
「けど、今までこんな事なかったわよ。なんでいきなり？」
「おそらく、封印の際に二つの魔力がぶつかったからだと思います。その衝撃が引き金になって暴走を……」

彼が推測を話す最中も力を増すロストロギア。

「クッ」

最初に動いたのはフェイトだった。
ジュエルシードの元にたどり着くと、それを両手で覆った。そして、魔方陣を展開する。このまま封印しようと試みたのだ。

しかし、次の瞬間

「アアアアアアアアアアアアアァァァァァァァ!!」

彼女の悲鳴が響いた。

「フェイト！」
「フェイトちゃん！」

駆け寄ろうとしたが、魔力の奔流が激しく、なかなか近付けない。離れた場所にいる当麻たちでも、体を押し戻されんばかりの強さだ。中心地点にいるフェイトはこれ以上の力を受けていることになる。

「止まれ、止まれ、止まって……！」

両手の布と皮膚が裂け、ポタ、ポタ、と血の雫をアスファルトを染

める。

「クソッ！」

そんな光景を見て黙っていられるほど、上条当麻は冷酷ではない。
足を前へ持っていく。
一歩。
もう一歩。
また、もう一歩。
ゆっくりと、確実に、彼女の元へ踏み込んでいく。

頬に赤い線が走る。そこから血が滴るが、構ってられない。
彼女のほうが苦しんでいる。つらい思いをしている。
ならばこの程度で、立ち止まってはいけない。

「アンタ！」
「上条さん！」
「危険です！　離れてください、上条さん！」

自分に向けられる美琴、なのは、ユーノの悲痛な叫び。
その返答は、決まっている。

「出来るわけねぇだろ！　手を伸ばせば、助けられるんだ……それなのに、アイツを助けなかったら、俺は、俺自身を許さねぇ……！」

また一歩踏み出す。

3メートル。
あと、もう少し。

1メートル。
痛みに耐え、肩を震わすフェイトが見える。
そして遂に
「フェイト、無事か？」
「と、当麻！？」
傷だらけになった彼女の手に触れる。
「後は、任せてくれ……」
半ば強引に手の覆いを取り、中にあったジュエルシードを右手で掴む。
その瞬間、バキンッ、という甲高い音が響いた。
彼の手の中には砕けた宝石の欠片。それも粉になり、宙へと舞う。
「あっ……」
口惜しそうに、フェイトはその粉を見送る。
「悪(わり)い、フェイト。ジュエルシード、ひとつ壊しちまった……」
事態が落ち着き、状況を顧みた時、事の重大さに気付く。
そもそも、当麻が彼女たちと別行動をとっていたのは幻想殺しで壊してしまうのを防ぐ為である。“異能”を打ち消す彼の右手に、善悪を判断することは出来ない。火傷を治す回復魔術も、世界を破壊する魔術も、幻想殺しの前では同じ“異能”になる。
そんな右手に魔力の塊であるジュエルシードが触れればどうなるか。
その結果がコレだ。

彼らにとって回避したかった事態が現実になってしまった。
それでも彼女は
「ううん。当麻は私を助ける為にやったんでしょ？　当麻が謝ることないよ」
笑顔で答える。
相手を思い、気遣う彼女の表情に当麻は歯噛みする。
自分の無力さが情けなかった。
「フェイトちゃん！」
「二人とも大丈夫！？」
事の顛末（てんまつ）を見るしかできなかったなのは、美琴の両名が駆け寄る。
二人の前に出ようとしたアルフだったが、当麻が制す。
「アルフ、そんな過剰に反応するなよ」
「けどさぁ……」
「二人ともコッチを心配してるだけだって。人の厚意を無碍（むげ）にすんなよ。いつかホントに独りになっちまうぞ」
「うぅ～……」
全身に込めていた力を緩めるアルフ。納得しきった訳ではないが、とりあえずは落ち着いてくれたようだ。
「待ってて。今、傷の手当てするから」
「……」
フェイトの手を取り、ハンカチで傷を覆うなのは。突然のことにフ

エイトは呆然としてしまう。
一方、当麻・美琴はというと

「まったく……アンタは何度無茶すれば気が済むのよ。それとも何？　そーゆーシュミでもあんの？」
「あってたまりますか、そんなシュミ。上条さんの趣向は正常ですよー」
「けどまぁ、軽口叩けるなら大した事もないでしょ」
「あぁ、心配掛けちまったな。その……スマン」
「べ、別に心配なんて……」

いつもどおりに互いの無事を確認する。

その時だった。

「全員、動くな！！」

空から声が響く。
声の方を見れば、一人の人物が浮かんでいた。黒いコート状のバリアジャケットを着込み、杖を構えた少年。

「しまった……！」
「あいつが誰か、知ってるのか？」

アルフに向けた当麻の問いかけに対する答えを口にしたのは、

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。先の次元震のことも含め、詳しい事情を訊かせてもらおうか」

他でもない、彼自身だった。

第１１話　三人目の魔導師（後書き）

圧縮圧縮、話を圧縮！

アレコレ擦り合わせて短縮狙ってます。
おかしい所があったら、教えてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0665m/

とある魔法の交差点(クロスポイント)

2011年10月22日00時18分発行